

| | |
|------|--------------------------|
| タイトル | ロシアの諺に見られる数量表現(2) |
| 著者 | 鈴木, 輝雄 |
| 引用 | 北海学園大学学園論集, 121: 135-184 |
| 発行日 | 2004-09-25 |

ロシアの諺に見られる数量表現(2)

鈴木輝雄

諺は、人間が古代から近代にいたるまでの長い生活経験を通して獲得した知恵、教訓、戒め、経験則、指針などを短い語句にまとめ、リズムカルに表現した口承文芸である。今でこそ人は文字を自由に読んだり書いたりしているが、昔はそうではなかった。文字が書けない、読めないのが普通という時代は長く続いてきたし、記録に残そうにも動物のなめし皮や白樺の木皮程度のものしかなかった時代もあったわけである。そのとき、教訓や指針などを繰り返し利用したり、他の人に伝えたりするためには暗誦して自分の頭の中に残すほか方法がなかった。当然ながら、暗記するためには長い語句よりも短い語句、リズムのないものよりリズムのあるものの方が覚えやすいことは明らかである。諺はこうして、長い年月のふるいにかけて磨かれることによって珠玉の光彩を放つ語句に形成されて行ったのであろう。現代まで淘汰されずに残っている諺に、滋味深く含蓄のあるものが多いのはそのためである。人間の社会生活における真理、経験則、教訓などを、前置きなしにズバリと言い切った短い語句には、寸鉄人を刺す鋭さがあり、思わず成程という感を抱かせるものがある。一方、諺集をひもとくとき、そこには人類が生きてきた古い時代の習慣や、はるか昔の生活様式がしばしば顔をのぞかせ、当時の文化や歴史的背景が分からない場合、一読しただけでは意味不明というものも少なくない。また、諺には、古語、現代語、外来語、固有名詞、地名、さらに寓話、伝説、宗教行事、風俗習慣、迷信、史実など各種雑多なものが渾然一体となって短い言葉の中に盛り込まれているため、母国語の話し手であっても改めてその意味の由来や詳しい説明を求められるとハタと当惑することもある。自国の諺でもそうであるから、ましてや他国の諺となると、四季の変化、宗教に関する行事など、なかなか実感をもって受け止められない部分も出てくる。当の国では誰でも知っている風習、昔話、童話などでも、部外者にとっては未知ということもしばしばある。「スラブのことわざ」の著者である栗原成都氏は自著の中で次のように述べている。

「学生時代、私は一冊のロシア語の本を手にして深い絶望感に襲われました。ロシア語の初等文法をひとつおろし学び終えて、辞書と首っ引きでレールモントフの『現代の英雄』、プーシキンの『大尉の娘』、ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』などのロシア文学の名作がまがいなりにも原語で読めるようになったひそかな愉悦を台無しにしてしまったのは、ソ連から新着書として届いた、くすんだ黄土色の、分厚いというよりは不恰好な一冊の本でした。ソ連では久方ぶりの復刊と宣伝さ

れたその本には高名なショーロホフが序文を寄せていました。ページをめくると、各ページに二行にわたることのほとんどない短いセンテンスが三十ほど並んでいる。読み始めると、わずか数語からなるにすぎない短い文が、どれもこれも読み取れないのです。かすかに文意の分かるものは三十の一つぐらい。注はほとんど施されてなく、文の意味をつかむ手がかりも見つかりません。およそ三万の意味不明の文の羅列の前に、絶望するほかありませんでした。(中略) 1957年版のダーリの『ロシア民衆の諺』がそれです。」([1], p.288)

謙遜は割引きしておかなければならないにしても、ロシア文学の古典が理解できる者にとってさえ諺は難しいと言わしめる状況がここにあることは間違いない。たしかに諺は、余計な説明や前後の文脈がなくそのものずばりを短いことばで言い表しているだけに、意味をとらえるだけでも難しいと言える。中には辞書に載ってない単語が使われていたり、文章が完結していない一言半句の省略形などもまざっている。また、表面的な意味は理解できても、一体それがどういうことを言おうとしているのかが分からないときもある。例えば、次のような慣用句は諺や格言の中にも頻繁に出てくるが、これらをぱっと見てすぐに真の意味が理解できるロシア語学習者は意外に少ないのではないだろうか。

- (a) а воз и ныне там (直訳：荷車はいまだそこにある)
- (b) велика важность! (直訳：きわめて重要)
- (c) как баран на новые ворота (直訳：新しい門に来た羊のごとく)
- (d) как свинья в апельсинах (直訳：みかんの中の豚のごとく)
- (e) лезть в бутылку (直訳：瓶の中に這いこむ)
- (f) семи пядей во лбу (直訳：7ピャージの額)
- (g) семь пятниц на неделе (直訳：1週間に7回の金曜日)
- (h) толочь в воду в ступе (直訳：臼で水を挽く)

これらの語句のいくつかについて [2], [3] などで真の意味を調べてみよう。

(a) а воз и ныне там：「ロシア人なら誰でも知っているイワン・クルイロフの寓話詞のうち『白鳥とカマスとザリガニ』に由来する表現。荷車を動かそうと白鳥とカマスとザリガニが集まったが、白鳥は空へ、ザリガニは後ろへ、カマスは水中へ、それぞれが思い思いの方向に荷車を引っ張ったので、荷車は軽いのに全く動かず、その場にとどまったままになっている、というのがこの寓話の筋である。ここから、この表現は『いつまでたっても事は一向に進捗せず、いまだ元の状態にとどまっている』と言いたいときに使われるようになった」というのであるが、はたしてロシア人以外の者にこの寓話の知識があるかである。

(b) велика важность! 「字句どおりには『大変重要なこと』であるが、この場合は反語で『ちっとも重要なことではない、大したことではない』の意」。これは、うっかりしそうな表現で、おそらく言われるまでは気がつかないであろう。

(c) как баран на новые ворота 「(羊は愚鈍な動物なので、自分の帰るべき家の門がつけかえら

れでもすれば、その家に入るべきかどうか分からなくなり) 新しい門を何が何やらさっぱり分からずぼかんと長い間眺めている、が原意。つまり、日本語の『狐につままれたようにぼかんと立っている』に相当する」。

(e) лезть в бутылку 「一説には、イスラム世界でその存在が信じられている霊鬼(ジン)をめぐる次のような寓話に由来する表現。霊鬼の頭領があるときソロモン王に瓶(壺)の中に閉じ込められ、海の底に捨てられた。400年ほどが過ぎたとき、瓶はある貧しい漁師の網にかかって引き上げられる。漁師は何も知らずにこの瓶の封印を解く。瓶から飛び出した霊鬼は漁師に向かい『瓶の中で300年を過ごした後、おれは、おれを瓶からだしてくれた者を殺すという誓いを立てていたのだ』と言う。漁師は『こんなに大きなお前さんが、本当にこんな瓶の中に入っていたとは、実際に入って見せてくれるまでは信じられない』と応じる。これに腹を立てた霊鬼は煙になって再び瓶の中に戻るが、漁師はすばやく瓶に封印をして霊鬼をやりこめる——という内容の説話である。この表現は『(下らぬことで)腹を立てる、癩癩を起こす(そして、そのため失敗する)』といった意味で、多くは第三者や相手を批判的に評する場合に使われる」

というように、いわく因縁を聞いてみればなるほどと合点が行くが、普通はなかなか気がつかないとしたものであろう。日本や中国にも故事成句というものがあって、それぞれの熟語に独自の意味づけがなされているが、それに類するものかも知れない。民族の歴史や風習に根ざす用語はなかなかその真の意味がつかめず、常識だけではいかんともし難いところがある。

ダーリの諺集には農業に関する天気予知や、収穫状況を察知するための言い伝えなどが非常に多く収録されている。これらを集めると一種の農業暦が出来上がるのではないかと思われるほどであるが、ここでロシアの暦法について簡単に触れておくことにしよう。

ロシアが西欧式の暦を使用し始めたのは10世紀末とされている。この時期に、キリスト教の伝来にともなってユリウス暦(юлианский календарь)が導入され、年代記の記述などに使用されるようになった。ユリウス暦とは、ユリウス・カエサルがエジプトを征服したとき、エジプトで用いられていた太陽暦の優れた点に気付き、これをローマに採り入れて紀元前46年に実施した暦法である。1年を365日6時間と計算し、4年ごとに366日の閏年を設ける。ロシアにもたらされたユリウス暦はビザンチン方式であったため、天地開闢紀元説に基づいている。すなわち、旧約聖書の天地創造の時点を経元1年とする方式で、西暦とは5508年の差がある。「原初年代記」などはこの天地開闢暦で記されているので、年代を普通の西暦に直すには5508年を差し引かなければならない。また、キエフ・ロシアの時代には1年の始めは3月であったが、モスクワ・ロシア時代になって、イワン3世の勅令により、1492年からは9月1日が年の始めと改められた。1年を通じての月の名称はローマ式のものであったが、民間ではスラブ固有の月名もあった。これについては後述する。

ユリウス暦は1年を365日6時間と計算するが、実際の太陽年の1年は365日5時間48分46

秒……である。このためユリウス暦は真の太陽年と一致せず、1年間で約11分14秒近くの誤差が生ずる。16世紀末までにこのズレは240時間にも達し、春分が10日も前にズレるという事態が発生した。キリスト教で重要な復活祭は春分を元にして決められるが、それがズレてしまうのは都合が悪い。そこでローマ法王グレゴリウス13世は改暦を検討し、いわゆるグレゴリオ暦(григорианский календарь)を作成した。これはユリウス暦を次の方法で補正しようというものである。「西暦年が4で割り切れる年は閏年とする。ただし、100で割り切れる年は平年とするが、400で割り切れる年は閏年とする」。カトリック教会はこのグレゴリオ暦を1582年10月15日(ユリウス暦10月5日)から実施し、年代を1世紀までさかのぼって計算し直した。グレゴリオ暦はまずイタリアやフランスなどのカトリック国で用いられるようになったが、ローマ法王の指示で作られたためプロテスタント諸国では採用されなかった。しかしその後、この暦法の優れた点が次第に認められ、イギリス、アイルランド、ドイツなどのプロテスタント諸国でも使われるようになった。ただし、ロシアなどギリシア正教国はその後もグレゴリオ暦を受け入れることはせず、ずっとユリウス暦を使い続けたため、西欧諸国との日付に無視できない差が生ずることになった。このためロシアは西欧諸国に対して18世紀で11日の遅れ、19世紀で12日の遅れ、20世紀で13日の遅れが生じた。ロシアは帝政時代を通じてピョートル1世の定めた旧ロシア暦を使い続けていたが、十月社会主義革命後、新政権はグレゴリオ暦に移行することを決定し、1918年1月31日の翌日を1918年2月14日とした。したがってロシアには1918年2月1日から1918年2月13日は存在しない。

ロシアの宗教上の行事や国の祝祭日などはすべてこの旧暦によっていた。また、農民が農事を始めたり、収穫を終えたりするための目安を与える日取りなどについては独自の民間暦が役立てられた。以下に、宗教上の祝祭日と民間暦をあげておく。諺の理解にかなり役立つのではないと思われる。なお、日付は旧暦(ユリウス暦)、カッコ内は現在のグレゴリオ暦である。

〈固定祝祭日〉

ロシア正教の12大祭：これは主イエス・キリスト(Господь, Иисус Христос)と聖母マリヤ(Богородица, Приснодева Мария)に関する記念日である。

- 12月25日(1月7日) Рождество Господа Бога и Спаса нашего, Иисуса Христа (降誕祭)
- 1月6日(1月19日) Крещение Господне (洗礼祭), Богоявление (神現祭)
- 2月2日(2月15日) Сретение Господне (迎接祭)
- 3月25日(4月7日) Благовещение Богородицы (聖母福音祭)
- 8月6日(8月19日) Преображение Господа (顕栄祭, 変容祭)
- 8月15日(8月28日) Успение Богородицы (聖母就寝祭)
- 9月8日(9月21日) Рождество Богородицы (聖母生誕祭)
- 9月27日(9月14日) Воздвижение Креста Господня (十字架挙栄祭)
- 11月21日(12月4日) Введение во храм Богородицы (聖母進堂祭)

※降誕祭から洗礼祭までの12日間がクリスマス週間 (святки)

〈移動祝祭日〉

復活祭：春分直後の満月の後の最初の日曜日，前後10日間の休み

- (1) Вербное воскресенье (聖枝祭) = 復活祭直前の日曜日
- (2) Вознесение (昇天祭) = 復活祭から40日目
- (3) Троицын день (聖神降臨祭) = 復活祭から50日目

〈その他宗教にちなむ主な祝祭日〉

- (1) Масленица (謝肉祭，復活祭直前の大齋に先立つ2日間)
- (2) Николин день (5月9日，12月6日，聖ニコラの日)
- (3) 聖霊記念日 (聖霊降臨祭の翌日)
- (4) День святых верховных апостлов Петра и Павля (6月29日，使徒ペテロとパウロの日)
- (5) Усекновение главы Крестителя Господня Иоанна (8月29日，洗礼者ヨハネ斬首の日)
- (6) Покров Пресвятой Богородицы (10月1日，聖母庇護祭)
- (7) Праздник иконе Пресвятой Богородицы Казанской (10月22日，カザンの聖母マリヤの日)

なお，これらの大きな祭りのほかにも四季それぞれに民間の祭りがある。農作業に密接に係る天候の予知や畑仕事を始める日，収穫の予測，木の実山菜などの生育の具合などの言い回しが諺の中で，それぞれの日付の呼び方と関連付けられて使われている。例えば，

Выгоняют в первый раз скот в поле вербою с *вербного воскресенья*.

Если первый снег на Сергия, то зима установится на *Михайлов день*.

などである。スラブの民間暦がどのようなものか，一応知っておくのも無駄ではあるまい。そこでスラブの民間暦の一覧を [4] から引用しておくことにしよう。古い月の名称は中部ロシアで用いられていたもの，それ以外の地域で用いられていたものなどにより異なった言い方がある。また，スペルもここで示したものと異なる形がある ([5], p.170)。イワン3世以後のロシア旧暦では9月1日が新年の始まりと定められていたので，ここでもその当時の慣例に従って9月から配列することにする。なお，月日はロシア旧暦の日付を表す。新暦の日付に直すには，13日を加えればよい。

Церковно-народный месяцеслов (ロシアの教会・民間暦)

СЕНТЯБРЬ (9月) – СЕНТЕМВРИЙ – РЮИНЫ (黄色の月)

- 1-й день – преподобного Симеона Столпника.
- 2-й день – св. мученика Мамонта.

4-й день — празднество Пресвятой Богородицы Неопалимой Купины.

8-й день — Рождество Пресвятой Богородицы.

14-й день — Воздвижение Честного и Животворящего Креста Господня.

15-й день — св. мученика Никиты.

23-й день — Зачатие пророка Предтечи и Крестителя Господня Иоанна.

24-й день — св. мученицы Феклы.

25-й день — преподобного Сергия Радонежского.

26-й день — св. апостола и евангелиста Иоанна Богослова.

ОКТАБРЬ (10月) — ОКТОБРИЙ — ЛИСТОПАД (落葉の月)

1-й день — Покрова Пресвятой Богородицы.

2-й день — св. мучеников Киприана и Иустины.

14-й день — преподобной Параскевы.

16-й день — Лонгина Сотника.

18-й день — св. евангелиста Луки.

19-й день — св. мученика Садока.

19-й день — св. мученика Артемия.

22-й день — Праздник Казанской иконы Пресвятой Богородицы.

26-й день — св. Дмитрия Солунского.

28-й день — св. великомученицы Параскевы.

29-й день — преп. Авраамия и Анастасии.

НОЯБРЬ (11月) — НОЕМВРИЙ — ГРУДЕНЬ (土塊の月)

1-й день — св. бессребреников Космы и Дамиана.

8-й день — Собор архистратига Михаила.

10-й день — св. Родиона Ледолома.

11-й день — преподобного Феодора Студита.

14-й день — св. апостола Филиппа.

15-й день — св. мучеников Гурия, Самона и Авива.

16-й день — св. апостола Матфея.

21-й день — Вход во храм Пресвятой Богородицы.

24-й день — великомученицы Екатерины.

26-й день — освящение церкви св. великомученика Георгия.

27-й день — преподобного Романа Чудотворца.

30-й день — св. апостола Андрея Первозванного.

ДЕКАБРЬ (12月) — ДЕКЕМВРИЙ — СТУДЕНЬ, СТУДНЫЙ (寒冷の月)

- 1-й день — памяти св. пророка Наума.
- 4-й день — св. великомученицы Варвары.
- 5-й день — св. Саввы Освященного.
- 6-й день — святителя и чудотворца Николая.
- 9-й день — зачатие св. Анны.
- 10-й день — св. великомученика Мины.
- 12-й день — преподобного Спиридона Тримифунтского.
- 18-й день — св. Модеста, архиепископа Иерусалимского.
- 19-й день — св. мученика Вонифатия.
- 21-й день — святителя Петра митрополита всея России.
- 23-й день — преподобного Инфанта, епископа Кипрского.
- 24-й день — Навечерие Рождества Христова.
- 25-й день — Рождество Господа нашего Иисуса Христа.
- 26-й день — собор Пресвятой Богородицы.
- 30-й день — св. мученицы Анисии.
- 31-й день — преподобной Меланин Римляныни.

ЯНВАРЬ (1月) — ПРОСИНЕЦ (青味の月)

- 1-й день — св. Василия Великого. Начало нового гражданского года.
- 3-й день — св. пророка Малахаи.
- 5-й день — навечерие Богоявления.
- 6-й день — Богоявление Господне.
- 16-й день — поклонение веригам св. апостола Петра.
- 18-й день — св. отцов Афанасия и Кирилла Александрийских.
- 22-й день — св. апостола Тимофея.
- 24-й день — преподобной Ксении.
- 31-й день — преподобного Никиты, епископа Новгородского.

ФЕВРАЛЬ (2月) — СЕЧЕНЬ (切断の月), СНЕЖЕНЬ (雪の月), ЛЮТЫЙ (凶暴な月)

- 1-й день — св. мученика Трифона.
- 2-й день — Сретение Господне.
- 3-й день — преподобного Симеона Богоприимца.
- 5-й день — св. мученицы Агафии.
- 10-й день — священномученика Харлампия.
- 11-й день — св. священномученика Власия.
- 13-й день — преподобного Мартиниана.

- 16-й день — преподобного Маруфы.
- 17-й день — св. великомученика Феодора Тирона.
- 25-й день — св. отца нашего Тарасия.
- 28-й день — преподобного Василия.
- 29-й день — преподобного Кассиана.

МАРТ (3月) — СУХЫЙ (乾燥の月), БЕРЕЗОЗОЛ (白樺の灰の月)

- 1-й день — преподобной мученицы Евдокии.
- 4-й день — преподобного Герасима.
- 5-й день — св. мученика Копана Исаврийского.
- 7-й день — св. Василия, по прозванию Капителя или Капельника.
- 9-й день — святых сорока мучеников.
- 17-й день — преподобного Алексия, человека Божия.
- 19-й день — св. мученицы Дарии.
- 20-й день — св. мученицы Фотинии Самарянки.
- 22-й день — священномученика Василия, пресвитера Анкирского.
- 24-й день — св. Кирилла.
- 25-й день — Благовещение Пресвятой Богородицы.
- 26-й день — преподобного Василия Нового.
- 27-й день — св. мученицы Матроны.
- 28-й день — св. Илариона.
- 30-й день — преподобного Иоанна Лествичника.
- 31-й день — священномученика Ипатия Чудотворца.

АПРЕЛЬ (4月) — АПРИЛИЙ — БЕРЕЗОЗОЛ (白樺の灰の月), ЦВЕТЕНЬ (開花の月)

- 1-й день — преподобной Марии Египетской.
- 5-й день — св. мученика Феодула.
- 8-й день — св. апостолов Иродиона и Руфа.
- 11-й день — священномученика Антипы.
- 12-й день — преподобного Василия Парийского (в Мизии).
- 13-й день — св. мученицы Фомаиды.
- 14-й день — св. Мартина-исповедника, папы Римского.
- 15-й день — св. апостола Пуда.
- 16-й день — св. мученицы Ирины.
- 17-й день — преподобного Зосимы.
- 20-й день — преподобного Феодора Трихины, т. е. Власяничника.

23-й день — св. великомученика Георгия Победоносца.

26-й день — св. Стефана. -27-й день -св. мученика Симеона.

МАЙ (5月) — ТРАВНИЙ (草崩の月)

1-й день — память св. великого пророка Иеремии.

2-й день — перенесение мощей свв. Бориса и Глеба.

3-й день — св. мученицы Мавры.

5-й день — св. мученицы Ирины.

6-й день — праведного Иова Многострадального.

8-й день — св. апостола Иоанна Богослова.

9-й день — Перенесение мощей святителя чудотворца Николая.

10-й день — св. апостола Самана Зилота.

11-й день — обновление Царьграда.

13-й день — св. мученицы Гликерии.

14-й день — св. мученика Исидора.

15-й день — преподобного Пахомия.

16-й день — преподобного Феодора Освященного.

20-й день — мученика Филалея.

21-й день — св. царя Константина и царицы Елены.

23-й день — св. Леонтия, епископа Ростовского.

25-й день — 3-е Обретение главы св. Иоанна Предтечи.

28-й день — преподобного Никиты Халкидонского.

29-й день — св. мученицы Феодосии.

ИЮНЬ (6月) — ИУНИЙ — ИЗОК (ギリギリスの月), ЧЕРВЕНЬ (深紅の月)

1-й день — св. мученика Иустиана.

3-й день — св. мученика Луккиллана.

8-й день — св. мученика Феодора Стратилата.

12-й день — преподобного Онуфрия Великого.

13-й день — св. мученицы Акилины.

15-й день — св. мученика Вита.

23-й день — св. мученицы Агриппины.

24-й день — Рождество св. Иоанна Крестителя.

27-й день — преподобного Сампсона Странноприимца.

29-й день — св. апостолов Петра и Павла.

30-й день — блаженного Петра-царевича и собор 12 апостолов.

ИЮЛЬ (7月) — ИУЛИЙ — ЧЕРВЕНЬ (深紅の月), ЛИПЕЦ (菩提樹の月)

- 1-й день — память свв. бессребреников Косьмы и Дамиана.
- 2-й день — Положение пояса Пресвятой Богородицы.
- 8-й день — Казанской Иконы Божией Матери.
- 18-й день — преподобного Иоанна Многострадального.
- 20-й день — св. славного пророка Или.
- 22-й день — св. мироносицы Марии Магдалины.
- 24-й день — св. князей Бориса и Глеба.
- 27-й день — св. Пантелеймона.
- 29-й день — св. мученика Каллиника.
- 30-й день — св. Иоанна Воина, или Воинственника.

АВГУСТ (8月) — ЗАРЕВ (空焼の月), СЕРПЕНЬ (鎌の月)

- 2-й день — перенесение мощей св. первомученика и архидиакона Стефана.
- 3-й день — преподобного Исаакия.
- 5-й день — св. мученика Евсигния.
- 6-й день — преображение господне.
- 10-й день — св. мученика Лаврентия Архидиакона.
- 15-й день — Успение Пресвятой Богородицы.
- 16-й день — Перенесение Нерукотворенного образа Иисуса Христа в Царьград.
- 18-й день — св. мучеников Флора и Лавра.
- 19-й день — св. мученика Андрея Стратилата.
- 22-й день — св. мученика Агафоника.
- 23-й день — св. мученика Лупа.
- 25-й день — св. мученицы Наталии.
- 28-й день — преподобного Моисея Мурина.
- 29-й день — Усекновение Честной Главы Святого Иоанна Предтечи.

この暦には、祝祭日がどのように祝われるのか、聖人や殉教者の名にちなんだ日に行うべき仕事（農作業、料理の準備、墓参りなど）の内容など、ある意味で年間行事日程表の観を呈しているのであるが、くわしいことは省略する。諺集 В. И. Даль: Пословицы русского народа で旧月名の使用例を探すと、確かにこれらのことばが使われていた実例を発見できる。いくつかの使用例を示しておこう。ただし、数詞は含んでいない。

Столбы (солнце с ушами, па солнца) — к *лютым* морозам.

Два Николы; один *травный*, другой морозный.

Феклы *заревницы* (*зарева* от осенних огнен). Замолотки.

На *заревницу* хозяину хлеба ворошок, а молотильщикам каши горшок.

Поздний *листопад* — на тяжелый год.

ロシアの諺に使われている数詞を拾って行くと、現在は使われていない古い形のものに出くわすことがある。代表的なのが8に関するもので、現代では *восемь* であるが以前は *осмь* が使われていた。これは8を表す古典ギリシア語 *ὀκτώ*, ラテン語の *octō* がスラブ世界に入って次第に変形し、現代にいたる途中の形であって時代によって少しずつ形が異なるところが興味深い。[6], [7]によってその形を調べてみると、次のようになる。なお、括弧内の数字は文献における使用年を表す。現代の形と同じ形のものも出てくるが、これは混在して用いられていたということであろう。

осмь, *осмии* (1057г., 1697г.) = *числ.* *восемь*

восемь (*восмь*) (1586г.) = *числ.* *восемь*

осмеро (*восмеро*) (1600г.) = *числ. собир.* *восемь*

осмеры (*восмеры*) (1697г.) = *числ. собир.* *восемь* или *восемь пар чего-л.*

осемый, *осмой* (*осмыи*, *осмьи*) (1441г., 1666г.) = *числ.* *восемью*

осмьнадесяте (1057г.) = *числ.* *восемнадцать*

осмьнадесять (XVI в.) = *числ.* *восемнадцать*

осматцать (ок. 1495г.) = *числ.* *восемнадцать*

осмьнацать (*осмнадцать*) (1552г., 1599г., 1640г.) = *числ.* *восемнадцать*

осмнадцать, *осмьнацать* (1640г.) = *числ.* *восемнадцать*

осмеронацатеро (1500г.) = *числ. собир.* *восемнадцать*

осмнадцатеры (1691г.) = *числ. собир.* *восемнадцать* или *восемнадцать пар чего-л.*

осмьдесять (1057г., 1678г.) = *числ.* *восемьдесят*

восмьдесять (*восмьдесять*) (1494г., 1670г.) = *числ.* *восемьдесят*

осмьдесятый (1733г.) = *числ.* *восемьдесятый*

осмьсот (*осмьсотъ*) (1150г.) = *числ.* *восемьсот*

восемьсотъ (*восмьсотъ*) (1568г.) = *числ.* *восемьсот*

また、古スラブ語、古代ロシア語では10から19までの数は1～9+на+десятеという形で表現されていた ([8], [9], [10], [11])。すなわち、

одинъ на десяте, *дѣва на десяте*, *трие на десяте*, …

という形であるが、この変形がВ. И. Дальの諺集にも出てくる。また、数詞100の古形変化は

単数(1): *съто*, *съта*, *сътоу*, *съто*, *сътъмь*, *сътъ*

双数(2): *сътъ*, *сътоу*, *сътома*, *сътъ*, *сътома*, *сътоу*

複数 (3以上) : съта, сътъ, сътомъ, съта, съты, сътъхъ

である([12], p.359)。ただし、順に主格, 生格, 与格, 对格, 造格, 所格である。双数とは、古代ロシア語で使われていた対のものを表す独特の「複数形」で、例えば両目, 両耳, 両手など2つのものが1組となっているのを表現するとき用いられた。また、所格とは、現在の前置格の旧名である。古い100の変化形はВ. И. Дальの諺集の中で使われている。18世紀, 19世紀の文献の中で、次のような用法が確認されている([14], p.213)。この時代には数詞100は名詞としてあつかわれていた。

Во *сте* сажнях стоялгосподский двор с аслом. (Радищев)

В деревне Мостах (во *сте* сорока верстах от Самары) случился пожар близ избы, где ночевал Пугачев. (А. С. Пушкин)

Доходу, говорят, получают по *сту* тысяч. (С. Т. Аксаков)

さらに、200から900までについては

дѣвъ сътъ, три съта, четыре съта, пять сътъ, ..., девять сътъ

のように数えたが、この形の変形したものもやはりВ. И. Дальの諺集の中に存在する。今回の検索作業でヒットしたものについてはいずれも、旧形として各分類項目の最後の部分に付け加えておくことにした。

現在われわれが利用している数は、時間や角度などの測定値以外は十進位取り記数法が用いられている。したがって、数を数えるときにも十進位取りに見合った数え方が理にかなったものとなる。ところが、ロシア語の数の数え方はそうになっていない。40と90のところで「突然変異」を起こす。すなわち、

двадцать, тридцать, *сорок* (четыредесятъ でない),

пятьдесят, шестьдесят, восемьдесят, *девянсто* (девяностъ でない)

ということで、なぜ括弧内の表現が使われないのかと不思議に感じるのは筆者だけではあるまい。このような変則的な数え方が、ただでさえ面倒なロシア語の数の数え方を一層煩雑なものにしている。この40と90については、実はかつてчетыредесяте, девятьдесятъ というような形が使われていたことが知られている([8], p.120)。この時代の方がむしろ数の数え方は整然としていた感がしないでもない。ところが13世紀頃からсорокが、14世紀頃からдевянстоが使われ始め、четыредесятеやдевятьдесятъは次第に姿を消してしまった。研究社露和辞典[13]にはсорокについて、第一義の40という意味のほかに「毛皮コート(шуба)一着分として必要なクロテン(соболь)の毛皮40枚より成る一山」という説明が書かれている。つまり、毛皮一山40枚を表す俗称が、十進数の40четыредесятеに取って代ってしまったというわけである。したがってсорокは正式に言えば数詞ではない。これを現在、数詞としてあつかおうというのであるから話がややこしくなるのも当然であろう。もっともこのような転化はロシア語に限ったことではな

いようである。デンマーク語の 80 を表す数詞は、元は 80 匹を一刺しにした串を意味していたという ([9], p.308)。数詞の体系を整然と保つよりも、多くの人々が喋っている言葉を標準にする方が現実的ということなのであろう。一方 *девяносто* については出所由来が明らかでないとする説が一般的であるが、

девять-до-ста = девять десятков до сотни

が異化によって今日の形に変化したのであろうという推測が行われている ([9], p.309)。いずれにしても 10 進位取り記数法が途中で損傷されてしまっていることは明らかである。

「印欧語における数の現象」の著者である泉井久之助氏は、ロシア語の数詞に関して次のように述べている。「ここでは数理が数詞によって大きく煩わされている。そこに、より著しく現れるのは、数詞自体の間の文法的な連帯性であって、数の数理的な連帯性ではない。いかにも数詞間の文法的連帯性はきびしく規定されている。しかしそのため、数理の連帯性はあいまいになる。語法が理法を抑えているのである。しかしさすがに今日では、むしろ数の理法を立てようとする試みがあるといわれている。一般に数詞は、数を言語的に外化して、これを社会的、意識的に、明らかにするところがある。しかしそれは必ずしも、数理を純粹・簡潔に再現するとは限らない。しかし印欧語本来の数詞の体系は今のロシア語のようなものではなかった。その行き方は漢語やマライ語に近く、もっと『自然』に近いものであった。ロシア語は理よりも語に執着しつつ、これを解体し、機構を改めて、かえって数理の明確・単純な表現からは遠ざかったのである。」([15], p.204) 同氏の主張は *сорок* や *девяносто* だけでなく、実はロシア語数詞の構成に関するもっと根本的な問題からの指摘で、例えば「2583 ルーブル」を言い表す次のような表現の中にもすでに困難さが現れているという。

主格・対格 *две тысячи пятьсот восемьдесят три рубля*

与 格 *двум тысячам пятьстам восьмидесяти трём рублям*

たしかに 4 桁以上の数の造格形などは非常に複雑な形となり、ロシア人自身でさえ日常的には省略した言いやすい形を使っているようである。なお、ダーリの諺集を調べると *сорок* や *девяносто* については、

Что девять *сороков*, что четыре *девяносто* — все одно.

В Москве *сорок сороков* церквей.

というような例が出てくる。現代ロシア語から見ると文法違反であるが、当時は数詞という概念はまだ存在せず、文法的には *один*, *два*, *три*, *четыре* は数形容詞、*пять*, *шесть*, …, *десять*, (и далее) は数名詞としてあつかわれていた ([16], p.627) から、このような表現は言いやすく、ごく当たり前のものであったのかも知れない。自国のことばは無意識の中で身につくからそこに合理性が欠けているなどということは、普通、なかなか気がつかないものである。

古い諺には帝政ロシア時代に使われていた長さや重さを測る用語がしばしば現れる。例えば、

Кашей сам с ноготь, борода с *локоть*, пуга (бич) с семь *сажен*.

Кирилловский поклон девяти *пяденей* с хвостом (монаст.).

К милому семь *верст* не околица.

のようなものであるが、現在は使われていないのでなじみのないものが多い。そこでメートル法実施以前のロシアの度量衡について若干触れておくことにしよう。

11世紀から12世紀のロシアでは、長さの単位として *пядь*, *локоть*, *сажень* などが用いられていた。*Малая пядь* は手の平を広げたときの親指と人指し指の間の長さ (約 19 cm) を表し、*большая пядь* は手の平を広げたときの親指と小指の間の長さ (約 23 cm) を表した。したがって、本稿 p.1 に示した(f) *семи пядей во лбу* (直訳: 7 ピャージの額) とは約 140 cm もの額を持つ人ということで、こんなに広い額をもつ人は賢明な人物に違いない、というところから聡明な人を言い表す慣用句となっているのである。*Сажень* は手を上げたときの手の中指の先端から足のつま先までの長さを表す。通常は *простая сажень* (約 152 cm)、場合によって *маховая сажень* (約 176 cm)、*косая сажень* (約 213 cm) を使い分ける。*Локоть* は腕の肘関節から中指の先端までの長さ (約 50 cm) を表す。このような物の長さの測り方は17世紀まで続くが、18世紀になるとピョートル1世はこの種のあいまいな単位を改めて次のように度量衡を整理し、相互間の関係をはっきりさせた。これは、ロシアの1サージェンがイギリスの7フットになるように基準を合わせたものである ([17], p.504)。

$$1 \text{ миля} = 7 \text{ верстам} \approx 7.469 \text{ km}$$

$$1 \text{ верста} = 500 \text{ сажений} \approx 1.0668 \text{ km}$$

$$1 \text{ сажень} = 3 \text{ аршинам} = 7 \text{ футам} \approx 2.0336 \text{ m}$$

$$1 \text{ аршин} = 16 \text{ вершкам} \approx 0.7112 \text{ m}$$

$$1 \text{ фут} = 12 \text{ дюймам} \approx 30.48 \text{ cm}$$

$$1 \text{ дюйм} = 10 \text{ линиям} \approx 2.54 \text{ cm}$$

$$1 \text{ линия} = 10 \text{ точкам} \approx 2.54 \text{ mm}$$

面積の測定は、これらの長さの単位を平方することによって行われた。16世紀に用いられていた土地の測定単位 *десятина* は 2400 平方 *сажень* であり、約 1.1 ヘクタールである。*Десятина* という用語は「10分の1 *верста* の正方形」というところから来ている。

牛乳、油、蜂蜜、ワインなどの液体を計るには、容積の概念が必要である。ロシアでは、古くは液体ばかりでなく穀物や粉末なども重量ではなく体積で計られていたが、そのとき用いられた道具が木製の桶であった。大桶を意味する *кадь* (約 100 l) はこれらのものを計る単位であり、穀物で言えば1 *кадь* は 14 *пуд* (1 *пуд* は約 16.38 kg) のライ麦に等しかった。17世紀になると、*кадь* の代わりに *четверть* が容積の単位となったが、これは 6 *пуд* のライ麦に等しかった。19世紀の前半になると、穀物などを計る基準は次のように整えられた。

$$1 \text{ четверть} = 8 \text{ четверикам} \approx 209.91 \text{ l}$$

1 четверик = 8 гарнцам \approx 26.239 l

1 гарнец = 200.15 куб. дюймам \approx 3.228 l

また、液体については次のような基準が設けられた。

1 бочка = 40 вёдрам \approx 491.96 l

1 ведро = 10 штофам \approx 12.299 l

1 штоф = 5 соткам = 2 бутылкам \approx 1.2299 l

1 бутыль = 5 соткам (чаркам) \approx 0.615 l

1 сотка (чарка) = 2 шкаликам \approx 0.123 l

重量については、18世紀のロシアで社会的に認められていた基準は次のようなものである。

1 ласт = 72 пудам \approx 1.179 t

1 берковец = 10 пудам \approx 1.638 kg

1 пуд = 40 фунтам \approx 16.38 kg

1 фунт = 32 лотам \approx 409.512 g

1 золотник = 96 долям \approx 4.266 g

重量に関する次のような話は興味深い。古い時代には、重さの単位と貨幣の単位はしばしば一致していた。バビロニアのシュッケリ、ローマのアッス、フランスのリブレ、イギリスのポンドなどはその好例である。古代ロシアにおける重量の単位 гривна も、一方では貨幣単位でもあり、1 гривна は 96 золотник の銀塊に等しかった。13世紀にこの гривна が半分に切断され(рубить), この半塊が рубль になったといわれる ([18], I, p.163)。

1875年、パリで度量衡の規格を定める20カ国の代表者会議が開催され、度量衡の国際事務局が設立されたとき、ペテルブルグ・アカデミー会員である数学者 B. S. ヤコビ (1801-1874) はこの度量衡体系をロシアに採り入れることに積極的に賛成したが実現はならなかった。その後、元素の周期律表で有名な化学者 D. I. Менделеев (1834-1907) の努力により、1889年、ロシアにもメートル法が導入されることになったが、この時点ではまだ社会的な拘束力はなかった。ついでながら、D. I. Менделеев が1893年から没するまでペテルブルグ度量衡局長官を務めていたことはよく知られている。国際基準の度量衡がロシアにおいて義務化されたのは十月社会主義革命後の1918年になってからであった。

余談であるが、最初にフランスにおいて考えられた1メートル(ギリシア語の $\mu\epsilon\tau\rho\acute{\omega}$ から)の定義は「北極からパリを通過して赤道までの距離の1000万分の1」というものであった。しかし、測定誤差が不可避であることが判明し、1960年の第11回国際度量衡総会では、1メートルを「クリプトン86から放射される赤みがかかったオレンジ色の光の波長の165万0763.73倍」と定義しなおしている。ところがこの定義もその後の研究で十分でないことが分かり、1983年には「光が真

空中を2億9979万2458分の1秒間に進む距離」と訂正された。

物事に迷信はつきものであるが、数字に関する迷信も例外ではない。日本では「四」が「死」に通ずるとか、「九」が「苦」につながるとかいうことで好まれない数になっているが、西欧ではよく知られているように13が嫌われる。これは「悪魔のダース」(чёртова дюжина)とも呼ばれ、人間の不幸や不運を13という数のせいにした。一方12は、2, 3, 4, 6の数で割り切れ実用的にも便利で良い数として認識され、人々の生活の中で重宝がられた。聖書にも12の選ばれた民とか、12使徒などという形で使われているし、1年を12ヶ月に分けたり、1日の昼の時間を12時間に分割したり、物を数えるときの12進法の基数として用いられたりしている。実際、古代ローマの度量衡は12進法であったし、この影響の下にイギリス通貨のポンド・スターリングは12進法に基づいて構成された。ただし、1971年2月以降はイギリス通貨は1ポンド=100ペンスという10進法に変っている。この好ましい12という数の次の13は素数であり、約数を持たないこともあって不便な数、悪い数としてあつかわれることとなった。無論これにはキリストの処刑が13日に行われたという宗教的な理由も関係している。さらに、13人のキリストの弟子のうち1人が裏切者になったというような話も13が不吉な数であることを印象づける元になったであろう。アパートや病院でも13号室が存在しないことがしばしばある。もちろん西欧では、何か願い事をす際13という数に希望を託しても、それが幸運をもたらすことはほとんどない。

これに対して、同じ素数でありながら7のあつかわれ方はちがう。太古の時代、4は数えきれない大きな数であったが、時代が進むにつれ7が4に取って代わり、次に10が7に、さらには20が10に……という風に次第に大きな数のイメージは変化して行った。7が漠然とした大きな数を表していたことの痕跡は今日まで残っている。次の諺などでは、7は特別の意味を持つ数ではなく、単に大きな値を表しているにすぎない。

Беда *семь* бед приводит.

Один с сошкой, *семеро* с ложкой

Семь бед — один ответ.

Семь раз отмерь, один раз отрежь.

Семеро одного не ждут.

古代バビロニアでは7は神聖な数であり、宗教もこの7に対しては神秘的な数として尊敬の念をこめて接していた。この伝統は後にギリシア、ローマへと伝わり、西欧世界における数字7への好意的な意識を形成することになる。7にまつわる話は多い。聖書には、神が6日で世界をつくり7日目に休んだ、と記されているし、ローマは7つの丘の上に立てられたとされている。また、古代・中世を通じて習得すべき知識は教養七課程(文法、論理学、修辞学、幾何学、算術、天文学、音楽)であったし、ドレミファの音階は7音、インドの七宝の首飾り、アールヌーボーの七宝の壺、ギリシアの7賢人、世界の7不思議、北斗七星、七つの海、七色の光、на седьмом

небе(有頂天, 最高の喜び), ラッキー 7, など枚挙にいとまがない。最近では 2000 年 5 月 13 日にプーチン大統領が 89 のロシア連邦体を 7 つの行政区に分割するなどしている。

以上のような理由から В. И. Даль, Пословицы русского народа の中でも 7 は使用例が多くなっているのに対して 13 などほんのわずかしが該当するものがない。もっとも数が大きくなれば使用頻度が低下するのは当然であるが, これはその前後の数の使用状態に比較しても, という意味においてである。

本稿では個数詞の 4 以上について引き続き [19] より得られた電子書籍から用例を検索抽出する。検索で抽出された最大の個数詞は 5000 (旧形 осьмой тысяч は除く) で, これより大きな数は使われていない。なお, 抽出した文書は [20], [21] などの原文と照合し正確を期した。

1.4 ЧЕТЫРЕ

個数詞 4 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 対格, 造格, 前置格である。

четыре, четырех, четырем, (主または生), четырьмя, четырех

この変化形のすべてについて該当するものを抽出した。語尾が同一のものはまとめ, 見出しはアルファベット順に並べた。個数詞 4 はロシアでは不吉な数ではないので相当使われている。一般に数の使用頻度は, 1, 2, 3, ……と値が大きくなるにつれて低くなる傾向があるが, 4 はまだ大きな値とは言えず, 四角, 四季, 四方, 四脚など身近なものにも関係するのでかなりの使用例がある。日本では奇数が好まれるがロシアを含め西欧ではむしろ偶数の方が好まれるようである。ただしロシアでは, 祝事の贈物などは 3 個, 5 個など奇数が使われる。

(1) четыре

Ах, судья, судья: *четыре* полы, восемь карманов!

Благому чудотворцу Николаю два праздника в году, а Касьяну немилостивому один в *четыре* года.

Был мал — в *четыре* дудки играл: вырос велик — землю поднял (вал).

В лыковце *четыре*, во ржавце два (вымя у коровы и у козы).

В стульце, в пультце двенадцать пулек: в Рогове *четыре*, во Ржеве городе (свинья).

В чистом поле *четыре* воли (хоть туда, хоть сюда, хоть инаково).

В чистом поле *четыре* воли.

В чистом поле *четыре* воли: хоть туда, хоть сюда, хоть инаково.

Выжгу да пепел раскину на все *четыре* стороны.

Выросло дерево от земли до неба, на этом дереве двенадцать сучков, на каждом сучке по *четыре* кошеля, в каждом кошеле по семи яиц, а сельмое красное (год).

Два Анисима, *четыре* Максима, седьмая Софья (стул, спинка, ножки, сиденье).

Два брюшка, *четыре* рожка (подушка).

Два бурава (крота), *четыре* хвоста (лапти).

Две головы и шесть ног; *четыре* ходят, а две смирно лежат (вершник).

Две деревянные, *четыре* коряки, восемь дыр верченых, девятая долбаная (вололье ярмо).

Деревня большая: *четыре* двора, восемь улиц.

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; *четыре* листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

Есть дерево об *четыре* дела: первое дело — мир освещает; другое дело — крик утишает; третье дело — больных исцеляет; четвертое дело — чистоту соблюдает (береза: лучина, деготь на колеса, береста на обвои горшков, банный веник).

Живут *четыре* царя: который умрет из них, то все за ним в могилу пойдут (*четыре* стихии).
Заклинают жнивы на все *четыре* стороны.

Как дважды два — *четыре* (верно).

Ковать на *четыре* молота (играть в карты).

Конь, нога бела — десять рублей, две ноги белы — двадцать рублей, три ноги белы — тридцать рублей, а *четыре* ноги белы — *четыре* рубля.

Кто все *четыре* поста постится, за того все *четыре* евангелиста.

Купите *четыре* угла, дайте *четыре* рубля, пятый на середку (гов. сваха, привезшая приданое).

Лежит колода поперек дороги, в колоде двенадцать гнезд, в гнезде по *четыре* яичка, в яичке по семи зародышков, что выйдет? (год).

Лен две недели цветет, *четыре* недели спеет, на седьмую семя летит.

Летела сова из красна села, села сова на *четыре* столба (выстрел).

Летела сова из красного села, села сова на *четыре* кола.

Летело стадо птиц на рощу; если по две на дерево — одно дерево осталось; сели по одной — одного не достало. Много ль птиц и дерев? (три дерева и *четыре* птицы.)

Ложка узка, берет по два куска: развести пошире — возьмет *четыре*.

Ложка узка, таскает по два куска, развести пошире, вытащит *четыре*.

На грязнху большая грязь — *четыре* седмины до зимы.

На один стан в *четыре* молота.

На одной неделе четверга *четыре*, а деревенский месяц — с неделей десять.

На одной неделе четверга *четыре*, и деревенский месяц с неделей десять.

На *четыре* брата пятый вверх ногами посажен (бабка снопов).

На что *четыре*: живет и о пяти.

Одна труба, *четыре* избы, восемь улица (разоренное имение).

Около — *четыре*, а прямо — шесть.

Перводан, другодан, на *четыре* угадал, пятьсот судья, пономарь ладья, щеголева теща, сам щеголек (конаются в игре).

Первой, другой, согнул дугой; три, *четыре* — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

Под одной шляпой *четыре* брата стоят (стол).

Покупала по *четыре* денежки, а продавала пару по два грошика.

Пусть устанавливается в *четыре* семины (седмицы) от Сергия.

Раз, два — упала гора; три, *четыре* — прицепило; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — деньги весить (конаются в игре).

Сито вито о *четыре* угла (борона).

Стоит город, в городе двенадцать башен, из каждой башни по *четыре* окошка, из каждого окошка по семи выстрелов (год, месяцы, недели, дни).

Стоит дерево, цветом зелено; в этом дереве *четыре* уголья: первое — больным на здоровье, второе — от теми свет, третье — дряхлых, вялых пеленанье, а четвертое — людям колодец (береза: банный веник, лучина, береста на горшки, березовица).

Стоит дуб, на дубу двенадцать ветвей, на каждой ветке по *четыре* отростка, на каждом отростке по семи прутьев (год).

Стоит столп, на столпе двенадцать гнезд, в гнезде по *четыре* чирка, у чирка по семи яиц (год).

Три (*Четыре*) у повода — тот же день.

У меня молодца *четыре* отца, пятый батюшка (бог, царь, духовник, крестный, родитель).

У нашего старосты *четыре* радости: лошади пропали, коров не найдут, два брата в солдатах, сестра в денщиках.

У него гостят *четыре* угла (никого).

Четыре брата бегут, друг друга не нагонят (колеса).

Четыре брата стоят под пятым: головками в куче, а спинками врознь (бабка снопов).

Четыре братца под одним шатром стоят (стол).

Четыре Василисы в одно место свилися (светец).

Четыре двора, а в каждом дворе кум да кума.

Четыре леда назад бородами (конские копыта со щетками).

Четыре дубинки березовые, пятый кнут, по заказу свит.

Четыре ноги подходят, *четыре* руки подносят (молодые).

Четыре орла одно яйцо снесли (четверо евангелистов).

Четыре полы — *четыре* голы, да и то не свое — в людях выпрошено.

Четыре полы, да бока голы (или: да и те голы).

Четыре полы, а бока голы. Полы в галунах, а карманы в дырах.

Четыре полы, восемь карманов (у приказного).

Четыре сестрицы в одну лунку плюют (доение коровы).

Четыре сестрицы в одну лунку целят (доить корову).

Четыре сестрицы вокруг гоняются; одна другой не догонит (воробы, мотовило).

Четыре сестрицы под одной фатицей (стол).

Четыре страны света на четырех морях положены.

Четыре ступихи, *четыре* гремихи, два бойца, одна маковица (корова).

Четыре стучихи, *четыре* гремихи, два богомола, один вихлец (корова: ноги, рога, хвост).

Четыре угла дому на строение, *четыре* времени году на совершение.

Четыре ходастых, два бодастых, один хлебестун (корова).

Четыре четьрки, две растопырки, один вертун да два яхонта (кошка).

Четыре четьрки, две растопырки, седьмой вертун (корова).

Четыре четьрки, две растопырки, седьмой вертун (собака).

Что девять сороков, что *четыре* девяносто — все одно.

Шуми, деревня: *четыре* двора, двое ворот, одна труба.

Это вернее смерти. Как дважды два — *четыре*.

(2) *четырёх*

Без троицы дом не строится, без *четырёх* углов изба не становится.

Без *четырёх* углов изба не рубится. Дом о *четырёх* углах.

И лошадь кашляет. Конь о *четырёх* ногах, да спотыкается.

И на доброго коня бывает спотычка. И на добра коня спотычка живет. Конь о *четырёх* ногах, да спотыкается.

Кладут под подушку хлеб и ножницы (или *четырёх* мастей королей) и по сну заключают о будущем.

Конь о *четырёх* ногах, да (да и тот) спотыкается.

Конь о *четырёх* ногах, да спотыкается.

Кузька да Васька ездили на Вятку, купили две шапки о *четырёх* углах — туда угол, сюда угол, по середке кисть, по затылку хлысть (дерут за волосы в карточной игре).

Невеста с приданым: у рук, у ног пальцев по две дюжины без мала, только *четырёх* не достало.

Семь без *четырёх* да три улетело.

Стоит Арон о *четырёх* лап, из году в год он водицу пьет (рассадник капустный).

Стоит Платонка о *четырёх* лапках, с году на год все воду пьет (рассадник).

Стоит Потап о *четырёх* лап, из году в год воду пьет (рассадник).

Утром на *четырёх* ногах, в полдень на двух, под вечер на трех (человек).

Четыре страны света на *четырёх* морях положены.

(3) **четырем**

Челом *четырем*, а пятому помогай бог!

1.5 ПЯТЬ

個数詞 5 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

пять, пяти, пяти, (対=主), пятью, пяти

この変化形のすべてについて該当するものを抽出した。語尾が同一のものはまとめることにする。なお、造格形は存在しなかった。5 という数は人間の片手の指の数でもあり、切れ目の良い数でもあるので昔からよく使われてきた。今回検出した用例では金銭に関係するものが多かった。

(1) **пять**

Без мяса, без костей, а все-таки *пять* пальцев (перчатки).

В пяти колодчиках сидят *пять* молодчиков (пальцы в перчатках).

В редьке *пять* еств: редечка триха, редечка ломтиха, редечка с маслом, редечка с квасом да редечка так.

В руке *пять* перстов. На пяти просвирах обедня.

Все детки одной матки. *Пять* перстов, а все одна рука.

Два кума Абакума, две кумы Авдотьи, *пять* Пантелеев (Фалалеев) да десять Андреев (дровни, полозья, оглобли, копылья).

Дорогой *пять*, а прямо десять (т. е. верст).

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; *пять* ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечн-

ых; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

Заступил, а *пять* рублей слупил.

Заступить заступил, а *пять* рублей слупил.

Здорово, кума! — В рынке была. — Никак ты, кумушка, глуха? — Купила курицу да петуха. — Прощай, кума! — *Пять* алтын дала.

Здорово, кума! — Да на рынке была. — Никак глуха? — Купила петуха (потроха). — Прощай, кума! — *Пять* алтын дала.

Лапти растеряли, по дворам искали: было *пять*, а стало шесть.

Маленький, удаленький — лосиный скок, звериный взгляд, *пять* братьев ловили, да не изловили; два брата словили, да и убили (блоха).

Мне плев *пять* рублей (прибавка: коли гроша нет).

Мужик и весь *пять* рублей (закон верит ему на *пять* р.).

Не полсорока, а двадцать. Полпятаста — те же *пять* девяносто.

Он и весь — то *пять* рублей. Его и всего — то за *пять* рублей купить.

Перванчики, друганчики, катали колобанчики, на *пять* костров половину дров, ехал шурин, высек череп, череп лысый — тот и вышел, вон пошел (конаются в игре).

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; *пять*, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

Плев *пять* рублей, а сто не деньги.

Плев, *пять* рублей, как денег ни гроша.

Потерял *пять*, а нашел семь.

Пять братьев по дороге бегут, да сухи; *пять* братьев под одоньем стоят, да мокры (пальцы обеих рук во время пряжи).

Пять братьев родных, *пять* двоюродных, у них по пяти внучатных (пальцы).

Пять денег да грош, *пять* копеек да денежка стара — много ли стало?

Пять подъедают, а *пять* подгоняют (пальцы и пряжа).

Пять пятков, пятьдесят прутков, двадцать пять стрел (борона).

Пять раз в году солнце играет: на рождество, богоявление, благовещение, светлое воскресенье, Иоанново рождение.

Пять, *пять* овечек зарод подъедают; *пять*, *пять* овечек (или: шестой барашек) прочь отбегают (пряденье).

Пять, *пять* овечек зарод подъедают; *пять*, *пять* овечек труху подбирают (пряденье).

Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; **пять**, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — деньги весить (конаются в игре).

Садила **пять**, вынула шесть; одного нет как нет.

Свинья мне не брат, а **пять** рублей не деньги.

Торгу на три алтына, а долгу на **пять**.

Хвать — ан мягких **пять** (т. е. одни пальцы).

Хвать похват, ан мягких **пять**.

Что полпятаста, что **пять** девяноста — те же девять сороков с девяностом.

Шел один, нашел **пять** рублей; трое пойдут, много ли найдут?

Шли двое — нашли **пять** рублей; семеро пойдут — много ли найдут? (по тройному правилу.)

Ягода, ягода! Не видал тебя два года, а и еще бы **пять** лет, так бы нужды нет.

(2) ПЯТИ

Без **пяти** просвир обедни нет, а шестая в запасе.

В **пяти** колодчиках сидят пять молодчиков (пальцы в перчатках).

В руке пять перстов. На **пяти** просвирах обедня.

Из **пяти** пальцев не вижу ни одного, а один в глазах семерит.

Купить на сто рублей сто скотин, платить — и по десяти рублей за одну, и по **пяти** рублей, и по пятидесяти копеек; по сколько скотин придется на каждую цену? (по пятидесяти копеек девяносто скотин, по **пяти** рублей девять скотин, по десяти рублей одна скотина).

На что четыре: живет и о **пяти**.

Он без спотычки **пяти** пальцев не сосчитает.

Он на **пяти** овинах рожь молотит.

Православная церковь о **пяти** главах.

Пришел грозен посол под Старицу: шуба навыворот, сам низенек, а поперек о **пяти** охватах; словечка не молвит, а только шипит: ан это? индейский петух.

Пять братьев родных, пять двоюродных, у них по **пяти** внучатных (пальцы).

Стоит море на **пяти** столбах, двое об нем спорят, один говорит: радость моя; другой говорит: пагуба моя (рюмка с вином в руке).

Стоит море на **пяти** столбах, тело-то (царь-то) говорит: радость моя, а душа-то (царица-то) говорит: пагуба моя (рюмка).

У двух матерей по **пяти** сыновей (пальцы).

У двух матерей по **пяти** сыновей, все в одно имя (пальцы).

1.6 ШЕСТЬ

個数詞 6 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

шесть, шести, шести, (対=主), шестью, шести

この変化形のすべてについて該当するものを抽出した。語尾が同一のものはまとめて示す。やはり, 4, 5, 6 と進むにしたがって使用例は減少してくる。

(1) шесть

Ворон, а не конь; черен (счерна), да не медведь; *шесть* ног без копыт; рогат, а не бык (черный таракан).

Вороная, да не кобыла, черная, а не медведь; *шесть* ног без копыт, рога есть, а не бык (блоха).

Где ни статья, ни сесть. Деревянный тулуп. Вотчина в косую сажень. Под дерновое одеяльце. Домок в *шесть* досок. В холодок, в темный уголок. Под заступ, под лопатку. Два рога, а не бык, *шесть* ног без копыт (рак).

Две головы и *шесть* ног; четыре ходят, а две смирно лежат (вершник).

Две головы, один хвост, две руки и *шесть* ног (вершник).

Душа умершего *шесть* недель на земле живет (почему, по истечении этого времени, пекут лесенки, чтобы душе лезть на небо).

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; *шесть* крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

Избу крой, песни пой, а *шесть* досок паси!

Лапти растеряли, по дворам искали: было пять, а стало *шесть*.

Лапти растеряли, по дворам искали: было *шесть*, нашли семь.

Летело сто гусей, навстречу им один гусь: “Здравствуйте, говорит, сто гусей!” — “Нет, нас не сто гусей: кабы было еще столько, да полстолька, да четверть столька, да ты, гусь, так бы нас было сто гусей”. Сколько их летело? (тридцать *шесть* гусей.)

На борту *шесть* пуговиц. Шестопер — атаманская булава.

На руку нечисты; лапти растеряли, по дворам искали, было *шесть* — стало (нашли) семь.

Около — четыре, а прямо — *шесть*.

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, *шесть* — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

Плюнь, дунь, свистни, скажи: *шестью шесть* — тридцать *шесть* (испытание пьяного).

По-латыни два алтына, а по-русски *шесть* копеек.

После покойника *шесть* недель стоит на окне стакан воды, а на углу избы, снаружи, вывешено полотенце (душа *шесть* недель витает на земле, до поминок, купается и утирается).

Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; пять, *шесть* — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — деньги весить (конаются в игре).

Садила пять, вынула *шесть*; одного нет как нет.

Сорок недель сидел я в темнице, *шесть* недель в больнице, двадцать недель меня вязали да год на виселице держали (человек).

Сосновый кувшин да вязовое блюдо в *шесть* аршин (приданое).

То и есть, что двадцать *шесть*.

Три коровушки есть, отелятся — будет *шесть*.

Шесть досок да холстинки платок.

Шесть недель покойник умывается, *шесть* недель утирается.

Шесть ног, две головы и один хвост (вершник).

(2) шести

Бежит бык о *шести* ног; сам без копыт, ходит, не стучит (таракан).

Ложка-то узка, таскает по три куска; надо ее развести, чтоб таскала по *шести*.

О *шести* ног, без копыт, ходит, не стучит (таракан и муха).

Черен, да не ворон; рогат, да не бык; *шести* ног без копыт (таракан).

Черный ворон с рогом, а не бык; об *шести* ног без копыт (жук).

(3) шестью

Плюнь, дунь, свистни, скажи: *шестью шесть* — тридцать шесть (испытание пьяного).

1.7 СЕМЬ

個数詞 7 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

семь, семи, семи, (対=主), семью, семи

この変化形のすべてについて該当するものを抽出した。語尾が同一のものはまとめることにする。数字 7 は、前にも触れた通り吉数であり、縁起の良い数なので格言の中でもさかんに登場する。以前は、漠然とした大きな数を 7 で代用したり、暦との関係で言えば 1 週の日数にもなっているのではなじみ深いこともあろう。

(1) **семь**

Анна **семь** лет с мужем жила, а до семидесяти вдовой была (пророчица Анна, встретившая И. Х. с Симеоном).

Бабушка неможет, дедушка **семь** лет костей не гложет.

Бабье лето **семь** дней, по Аспасов день. Бабье лето две недели.

Беда **семь** бед приводит.

Беда **семь** бед приводит. Всякая беда по семи бед рождает.

Быть тебе (ему) **семь** веков на людских памятях.

В Вильне **семь** дорог для жида да три для поляка.

Валяй, кургузка, недалече до Курска: **семь** верст отъехали, **семьсот** ехать.

Виден (Симбирск), да **семь** ден идем.

Видно, город велик, что **семь** воевод (московская семибоярщина).

Вон пирог на **семь** дорог.

Где Макар побывал, **семь** лет рыба не ловится. (они сьмают рыбную ловлю в речках и озерах и мастера вылавливать всю рыбу).

Для друга нет круга. Для друга **семь** верст не околица.

Для друга **семь** верст не околица.

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; **семь** чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

Живет и такой год, что на день **семь** погод.

Жила лошадь у семи попов по семи годов — стало ей **семь** годов.

За **семь** верст киселя есть. За море по еловы шишки.

Загадка, разгадка, да **семь** верст правды.

К милому и **семь** верст не околица.

К милому **семь** верст не околица.

Как у тещи зять в гостях — за **семь** верст заезжают; как у свояка свояк в гостях — за **семь** верст объезжают (брань).

Как я тебе дам пинка, так тебя **семь** лет голенищами понесет.

Кашей сам с ноготь, борода с локоть, пуга (бич) с **семь** сажен.

Кота убить — **семь** лет ни в чем удачи не видать.

Лапти растеряли, по дворам искали: было шесть, нашли **семь**.

Лук **семь** недугов лечит. Лук да баня все правят.

Лук *семь* недугов лечит. Лук от семи недугов.
Лучше *семь* топоров, чем *семь* копылов.
Макару поклон, а Макар на *семь* сторон.
Мостится мост на *семь* верст, на мосту куст, на кусту цвет на весь белый свет (будни, воскресные дни и пасха).
Мужик за спасибо *семь* лет работал. Мужик за спасибо *семь* лет в батраках жил (от сказки).
Мужика *семь* лет в котле варить.
На неделе *семь* дней. *Семь* мудрецов на свете было.
На одном дне *семь* пятниц.
На одном часу и снег и дождь. На одной неделе *семь* пятниц.
На поминки идет — брюхо в *семь* овчин сошьет.
На руку нечисты; лапти растеряли, по дворам искали, было шесть — стало (нашли) *семь*.
На Самсона дождь — *семь* недель дождь.
Насказал *семь* четвергов, а все кряду.
Не велик городок, да *семь* воевод (семибоярщина).
Не строй *семь* церквей, пристрой *семь* детей (т. е. сирот).
Он *семь* лет все на одной дудке играет.
Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; *семь*, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).
После хлеба-соли добрые люди *семь* часов отдыхают.
После хлеба-соли *семь* часов отдыхать.
Потерял пять, а нашел *семь*.
Почем нанялись? Да *семь* дней работы, а спать на себя (или: про себя).
Почем нанялся? — Да в неделю работать *семь* дней, а спать на себя.
Пошехонцы — слепороды: в трех соснах заплутались. За *семь* верст комара искали, а комар на носу. На сосну лазили, Москву смотрели. Я слушаю: кто свищет? ан это у меня в носу. Ноги под столом перепутали. С краю не ложатся, а все в середину (о пошехонцах Яросл. и галичанах Костр. рассказывают много в этом роде, о чем издана целая книжка, впрочем, подражание немецкой, о швабах).
При этом огне *семь* шатров цыган вымерзло (говорят, когда кто долго огня не вырубит).
Про глухого семью (*семь* раз) обедни не служат.
Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; пять, шесть — бьют шерсть; *семь*,

восемь — сено косим; девять, десять — деньги весить (конаются в игре).
Рыкнул вол на *семь* сел (колокола).
Свинье *семь* огородов изрыть: тогда и чурку носить.
Семь бед — один ответ.
Семь бед — один ответ. Уж заодно отвечать.
Семь без четырех да три улетело.
Семь в тебе душ, да ни в одной пути нет (двуличен).
Семь верст до небес и всё лесом.
Семь дев сеют лен.
Семь деревень, а лошадка одна. На *семь* деревень одна лошадь.
Семь крутых утренников: три до Власья, один на три после Власья.
Семь лет маку не родило, а голоду не бывало.
Семь лет маку не родило, а голоду не было.
Семь листов бумажных, один золотой (великий пост и пасха).
Семь отроков — сеногной, сено гноят.
Семь планид на небе.
Семь пятниц (*Семь* праздников) на неделе.
Семь раз отмерь, один раз отрежь.
Семь раз поели, а за столом не сидели.
Семь рек осушила, холста не смочила.
Семь сел, один вол, да и тот гол.
Семь Семионов, одна Матрена (песты и ступа в мельнице).
Семь те стрел каленых, страшилище.
Семь топоров вместе лежат, а две прялки врознь.
Служил *семь* лет, выслужил *семь* реп (прибавка: да и тех нет).
Стоит дуб, на дубу клуб, на клубе *семь* дыр (человек).
Стоит мост на *семь* верст: на мосту дуб, на дубу цвет во весь белый свет (великий пост и пасха).
Стоит мост на *семь* верст; по конец моста золота верста (великий пост и воскресение Христово).
Стоит столб на *семь* ворот: на осьмых воротах яблонь, на яблоне цвет во весь свет (пасха).
Три бабы — базар, а *семь* — ярмарка.
У бабы *семь* пятниц на неделе.
У боярина *семь* дочерей — будет из них и за смердом жена.

У боярина **семь** дочерей: будет на них и смерть, и жена.
У нас дураков **семь** байдаков, да еще и угол не почат.
У одной овечки да **семь** пастухов (московская семибоярщина).
У пьяного **семь** коров доится, а проспится, так и переходницы нет.
Хорошо бьет ружье: с полки упало — **семь** горшков разбило.
Хоть семью (т. е. **семь** раз) подои, так каша с водой (т. е. доить нечего).
Чеснок **семь** недугов изводит. Лук **семь** недугов лечит.
Шелков клуб, **семь** дыр вокруг (человек).

(2) семи

Беда семь бед приводит. Всякая беда по **семи** бед рождает.
В **семи** дворах один топор.
Выросло дерево от земли до неба, на этом дереве двенадцать сучков, на каждом сучке по четыре кошеля, в каждом кошеле по **семи** яиц, а седьмое красное (год).
Деревня на **семи** кирпичах построена.
Ехал не путем, погонял кулаком: куда ни поедет, **семи** верст не доедет.
Ждали прибылого, ан весь матерой (ан **семи** осеней. охотн.).
Жила лошадь у **семи** попов по **семи** годов — стало ей семь годов.
Зверок с вершок, а хвост **семи** верст (иголка с ниткой).
Землица с **семи** могил добрых людей спасает от всех бед.
Из **семи** печей хлеба едал (т. е. опытен).
Кабы у меня брюхо из **семи** овчин, все один бы съел.
Ковры **семи** шелков, а рубаха и не прядена.
Лежит колода поперек дороги, в колоде двенадцать гнезд, в гнезде по четыре яичка, в яичке по **семи** зародышков, что выйдет? (год).
Лук семь недугов лечит. Лук от **семи** недуг.
На всякого враля по **семи** ахальщиков.
На всякого крестьянина по **семи** баринов.
На всякого майданщика (игрока в орлянку, зернь) по **семи** олухов.
На одних подметках **семи** царям служил.
На **семи** верстах один с денежкой Аким.
На **семи** поясах бог поставил звездное течение.
Невеста родится, а жених на конь садится (на коня сажали трех-**семи** лет).
От **семи** собак на распутье отгрызется.

По *семи* молодцов на овсяный блин.
Полтина без алтына, без сорока *семи* копеек.
Попово брюхо из *семи* овчин сшито.
Поповское брюхо из *семи* овчин сшито.
При *семи* дворах, восемь улиц.
Пришел сон из *семи* сел, пришла и лень из *семи* деревень.
Семи пяденей во лбу.
Семи пяденей во лбу. Промеж глаз калена стрела ляжет.
Сеян лен у *семи* Олен.
Сидит тупка в *семи* юбках (луковица).
Стоит бык на горах о *семи* головах, ребра стучат, бока говорят (колокольня с колоколами).
Стоит город, в городе двенадцать башен, из каждой башни по четыре окошка, из каждого окошка по *семи* выстрелов (год, месяцы, недели, дни).
Стоит дуб, на дубу двенадцать ветвей, на каждой ветке по четыре отростка, на каждом отростке по *семи* прутьев (год).
Стоит столп, на столпе двенадцать гнезд, в гнезде по четыре чирка, у чирка по *семи* яиц (год).
Стоит цвет, всему миру свет, на *семи* верстах, на *семи* столбах (великий пост и пасха).
Сунуло Еремушку к *семи* чертям.
Сутки с неделей без *семи* дней. Без году год со днем.
У всякого крестьянина по *семи* баринов.
У *семи* няnek дитя без глазу.
У *семи* няnek дитя без глазу. У *семи* пастухов не стадо.
У *семи* пастухов не стадо.
У хорошей невесты по *семи* подруг (по обычаю в Курск.).
Чай проклят на трех соборах, а кофе на *семи* (раск.).
Чай, кофе, картофель, табак прокляты на *семи* вселенских соборах (раск.).
Юрьева роса от сглаза, от *семи* недугов.

(3) семью

Над *семью* поясами небесными сам бог, превыше его покров.
Про глухого *семью* (семь раз) обедни не служат.
Хоть *семью* (т. е. семь раз) подои, так каша с водой (т. е. доить нечего).
Это печать премудрости Соломоновой, с *семью* (девятью, двенадцатью) столпами (говорится

о чем-либо таинственном или непонятном).

1.8 ВОСЕМЬ (ОСЕМЬ)

個数詞 8 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

восемь, восьми, восьми, (対=主), восемью, восьми

この変化形のすべてについて該当するものを抽出したものを以下に示す。語尾が同一のものはまとめることにする。なお, 生格形, 与格形, 造格形は存在しない。

(1) ВОСЕМЬ

Ах, судья, судья: четыре полы, **восемь** карманов!

Две деревяки, четыре коряки, **восемь** дыр верченых, девятая долбаная (вололье ярмо).

Деревня большая: четыре двора, **восемь** улиц.

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; **восемь** кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

На будущую осень, годов через **восемь**.

Одна труба, четыре избы, **восемь** улица (разоренное имение).

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь, **восемь** — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

При семи дворах, **восемь** улиц.

Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; пять, шесть — бьют шерсть; семь, **восемь** — сено косим; девять, десять — деньги весить (конаются в игре).

Рожь поспеваает из закрома в загром в **восемь** недель (северн.).

Три тулова, три головы, **восемь** ног, железный хвост, кованый нос (соха с бороной).

Четыре полы, **восемь** карманов (у приказного).

Шел я в осень, нашел я **восемь**, мясо бросил, шкурку износил, а голову съел (лен).

<旧形>

Глядит, ровно семерых проглотил, **осьмым** поперхнулся.

Дьявол **осьмую** тысячу живет.

Невеста в пол-**осьма** аршина, а поперек себя половина.

Стоит столб на семь ворот: на **осьмих** воротах яблонь, на яблоне цвет во весь свет (пасха).

1.9 ДЕВЯТЬ

個数詞9は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

девять, девяти, девяти, (対=主), девятью, девяти

この変化形のすべてについて該当するものを抽出し以下に示す。語尾が同一のものはまとめることにする。この辺りの数で生格形, 与格形, 造格形がすべて存在するのはめずらしい。

(1) девять

Девять братьев под одной шапкой (бабка снопов).

Девять дён, *девять* верст — как сокол летел.

Добрая земля назем раз путем примет, да *девять* лет помнит.

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; *девять* в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; два на десять апостолов.

Купить на сто рублей сто скотин, платить — и по десяти рублей за одну, и по пяти рублей, и по пятидесяти копеек; по сколько скотин придется на каждую цену? (по пятидесяти копеек девяносто скотин, по пяти рублей *девять* скотин, по десяти рублей одна скотина).

Много временщик, как *девять* лет, — а больше нет (т. е. пробудет).

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; *девять*, десять — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; *девять*, десять — деньги весить (конаются в игре).

С пальцем *девять*! (острота при подаче кому руки.)

Что *девять* сороков, что четыре девяносто — все одно.

Что полпятаста, что пять девяноста — те же *девять* сороков с девяностом.

(2) девяти

В *девяти* без пути (играть).

Кирилловский поклон *девяти* пяденей с хвостом (монаст.).

От оспы: три горошины перебирать счетом трижды по *девяти* раз, считая — ни раз, ни два, ни три...

(3) девятью

Что хитро, то и просто: *девятью* десять девяносто.

Это печать премудрости Соломоновой, с семью (*девятью*, двенадцатью) столпами (говорится о чем — либо таинственном или непонятном).

1.10 ДЕСЯТЬ

個数詞 10 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

десять, десяти, десяти, (対=主), десятью, десяти

この変化形のすべてについて該当するものを抽出し以下に示す。語尾が同一のものはまとめることにする。10 という数は切れ目の良い数であり十進法の基礎にもなっているのでやはり多く使用されている。生格形, 与格形, 造格形がすべて存在するのもそのためであろう。

(1) десять

Где на о ко, где на батман (о ко три фунта, батман — *десять*).

Год служи, да *десять* лет тужи.

Два кума Абакума, две кумы Авдотьи, пять Пантелеев (Фалалеев) да *десять* Андреев (дровни, полозья, оглобли, копылья).

Десять раз примерь, один раз отрежь.

Дорогой пять, а прямо *десять* (т. е. верст).

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; *десять* божьих заповедей; *единдесять* праотец; два на *десять* апостолов.

Знаешь ты с редькой *десять* (тамбоаск., т. е. ничего не смыслишь).

Конь, нога бела — *десять* рублей, две ноги белы — двадцать рублей, три ноги белы — тридцать рублей, а четыре ноги белы — четыре рубля.

Кто украд — у того один грех; у кого украли — у того *десять* (т. е. от поклепу).

Лучше *десять* раз поворотить, чем один раз на мель стать (морск.).

Мастер один, а подносчиков *десять*.

На одной неделе четверга четыре, а деревенский месяц — с неделей *десять*.

На одной неделе четверга четыре, и деревенский месяц с неделей *десять*.

Никто беды не перебудет: одна сбудет — *десять* будет.

Один год *десять* лет (или: весь век) заел.

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь,

восемь — сено косим; девять, *десять* — девок весить; одиннадцать, двенадцать — некуда деваться (конаются).

Первую пить — здраву быть, вторую пить — ум повеселить, утроить — ум устроить, четверту пить — неискусну быть, пятую пить — пьяну быть, чара шестая — мысль будет иная, седьмую пить — безумну быть, к осьмой приплести — рук не отвести, за девятую приняться — с места не подняться, а выпить чарок с *десять* — так поневоле взбесят.

После родов женщина *десять* дней в гробу стоит (т. е. больна).

Прямуку одна дорога, поползну *десять*.

Раз, два — упала гора; три, четыре — прицепило; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, *десять* — деньги весить (конаются в игре).

Русский час — *десять*, а немецкому и конца нет.

Русский час — с днем тридцать; деревенский месяц — с неделей *десять*.

Скажешь слово, а прибавят *десять*.

Сорока с тыну, а *десять* на тын.

Спорина против спорины не приходится: ржи *десять* мер на десятину, а маку — мужичью шапку.

Ты ему слово, а он тебе *десять*.

Цыгане Мценск *десять* верст обходили (Орлов.).

Что хитро, то и просто: девятью *десять* девяносто.

(2) десяти

Купить на сто рублей сто скотин, платить — и по *десяти* рублей за одну, и по пяти рублей, и по пятидесяти копеек; по сколько скотин придется на каждую цену? (по пятидесяти копеек девяносто скотин, по пяти рублей девять скотин, по *десяти* рублей одна скотина).

На руках, на ногах по *десяти* перстов. Без десятков и счету нет.

Пера, эра, чуха, рюха, пята, сота, ива, дуба, мака, крест (шуточный счет до *десяти*).

(3) десятиью

Десятью примерь, однова отрежь.

Его *десятью* пестами в ступе не уловишь.

1.11 ОДИННАДЦАТЬ

個数詞 11 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

одиннадцать, одиннадцати, одиннадцати, (对=主), одиннадцатью, одиннадцати

常識的には 11 などという数が諺などに使用されるのはおかしい,と思われるが実例が若干あった。ただし,使われているのは主格のみである。なお,旧形の *единдесять* もここに含めた。

Одиннадцать ради нечета.

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; *одиннадцать*, двенадцать — некуда деваться (конаются).

<旧形>

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; *единдесять* праотец; два на десять апостолов.

1.12 ДВЕНАДЦАТЬ

個数詞 12 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

двенадцать, двенадцати, двенадцати, (対=主), двенадцатью, двенадцати

1年が12ヶ月から成ることもあり, 12 という数は割合人々の生活になじみのある数である。ただし, 日本のように月の名前に数字が使われているわけではない。大部分は主格であるが1例だけ斜格があった。

また, 古い言い方 два на десять もここに含めることにした。

В году *двенадцать* месяцев. *Двенадцать* апостолов и колен израильских.

В стульце, в пульце *двенадцать* пулек: в Рогове четыре, во Ржеве городе (свинья).

Выросло дерево от земли до неба, на этом дереве *двенадцать* сучков, на каждом сучке по четыре кошеля, в каждом кошеле по семи янц, а седьмое красное (год).

Двужильную лошадь зарывай на дворе, не то выпадет за нею еще *двенадцать* лошадей.

Клад положен, головою наложен, а кто знает, достанет. (напр., клад положен на *двенадцать* голов молодецких: ведун принес *двенадцать* воробьиных голов и взял клад; воробей чем не молодец?)

Лежит колода поперек дороги, в колоде *двенадцать* гнезд, в гнезде по четыре яичка, в яичке по семи зародышков, что выйдут? (год).

Мужик купил три козы, заплатил за них *двенадцать* рублей, по чему каждая коза пришла? (по земле).

От глазных болей — *двенадцать* раз умываться росой.

От Николы осталось *двенадцать* морозов (утренников), коли не весной, то до Семена дня (1 сентября).

Первой, другой, согнул дугой; три, четыре — прискочили; пять, шесть — бьют шерсть; семь, восемь — сено косим; девять, десять — девок весить; одиннадцать, *двенадцать* — некуда деваться (конаются).

После Егорья бывает еще *двенадцать* морозов (низовое).

Разложи воробья на *двенадцать* блюд.

Стоит город, в городе *двенадцать* башен, из каждой башни по четыре окошка, из каждого окошка по семи выстрелов (год, месяцы, недели, дни).

Стоит дуб, на дубу *двенадцать* ветвей, на каждой ветке по четыре отростка, на каждом отростке по семи прутьев (год).

Стоит столп, на столпе *двенадцать* гнезд, в гнезде по четыре чирка, у чирка по семи яиц (год).

Триста шестьдесят пять галок, пятьдесят два сокола, *двенадцать* орлов, сосенка золотая, маковица сухая (год).

Я стар, родилось от меня *двенадцать* сыновей, а от каждого из них по тридцать дочерей, наполовину красных и черных (год).

Был и конь по *двенадцати* мордок (по преданию, мордка — полуполушка).

<旧形>

Един бог; два тавля Моисеевых; три патриарха на земле; четыре листа евангельска; пять ран господь претерпел; шесть крыл херувимских; семь чинов ангельских; восемь кругов солнечных; девять в году радостей; десять божьих заповедей; единдесять праотец; *два на десять* апостолов.

1.13 ТРИНАДЦАТЬ

個数詞 13 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

тринадцать, тринадцати, тринадцати, (対=主), тринадцатью, тринадцати

西欧では 13 という数は縁起の悪い数と見なされているため使用例はあまり多くない。ここでも 13 は不吉な数ということに関してだけ使われている。

Тринадцать — несчастливое число (от Иуды предателя).

Он из таких, что по *тринадцати* на дюжину кладут, да и то не берут.

По *тринадцати* на дюжину да грош придачи.

Тринадцатый под стол. Плохих по *тринадцати* на дюжину кладут (да и то не берут).

1.14 ЧЕТЫРНАДЦАТЬ

個数詞 14 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

четырнадцать, четырнадцати, четырнадцати, (対=主), четырнадцатью, четырнадцати
この辺の数だと無くて当然とも思えるが主格と斜格を合わせて 2 例ある。

Рассыпался горох на *четырнадцать* дорог (народ из церкви).

Невеста *четыренадцати* вершков в отрубке.

1.15 ПЯТНАДЦАТЬ

個数詞 15 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

пятнадцать, пятнадцати, пятнадцати, (対=主), пятнадцатью, пятнадцати
比較的切れ目の良い数だけに主格と斜格を合わせて 7 例が抽出されたが, うち 5 例は事実上同じものである。

Мужик съел *пятнадцать* калащыков с калащышком, полведерко огурцыков, полмяконького (т. е. полситного) да тридцать кисточек рябинки, а все вода водой.

Секу, секу двадцать, высеку *пятнадцать*, будь мои *пятнадцать* все сполна (рубят ножом по щепке *пятнадцать* зарубок).

Секу, секу двадцать, высеку *пятнадцать*, все сполна до едина пятна (то же).

Секу, секу двадцать, высеку *пятнадцать*, сек, пересек, до пятнадцати досек.

Секу, секу двадцать, высеку *пятнадцать*, стану честь, все *пятнадцать* есть (или: здесь; конаются в игре).

Сто лет, да двадцать, да маленьких *пятнадцать*.

Секу, секу двадцать, высеку *пятнадцать*, сек, пересек, до *пятнадцати* досек.

1.16 ВОСЕМНАДЦАТЬ (ОСЬМНАДЦАТЬ)

個数詞 16, 17 についての使用例は発見できなかった。少なくとも今回用いた資料の中では使われていない。個数詞 18 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

восемнадцать, восемнадцати, восемнадцати, (対=主), восемнадцатью, восемнадцати
使用例はごくわずかである, 古い形 осьмнадцать を含めて 2 例だけである。

В *восемнадцать* лет жениться, чтоб на тягло садиться.

Что *осьмнадцать*, что без двух двадцать.

1.17 ДВАДЦАТЬ

個数詞 19 は使われていない。個数詞 20 は次のように変化する。順に主格、生格、与格、造格、前置格である。

двадцать, двадцати, двадцати, (対=主), двадцатью, двадцати
切れ目の良い数でなじみ深いためか 11 例が抽出された。

Двадцать лет чернила составлял (мешал).

Конь, нога бела — десять рублей, две ноги белы — *двадцать* рублей, три ноги белы — тридцать рублей, а четыре ноги белы — четыре рубля.

Кто в *двадцать* лет не здоров (не хорош), в тридцать не умен, а в сорок не богат, тому век таким не бывать.

Не полсорока, а *двадцать*. Полпятаста — те же пять девяносто.

Секу, секу *двадцать*, высеку пятнадцать, будь мои пятнадцать все сполна (рубят ножом по щепке пятнадцать зарубок).

Секу, секу *двадцать*, высеку пятнадцать, все сполна до едина пятна (конаются в игре).

Секу, секу *двадцать*, высеку пятнадцать, сек, пересек, до пятнадцати досек.

Секу, секу *двадцать*, высеку пятнадцать, стану честь, все пятнадцать есть (или: здесь; конаются в игре).

Сорок недель сидел я в темнице, шесть недель в больнице, *двадцать* недель меня вязали да год на виселице держали (человек).

Сто лет, да *двадцать*, да маленьких пятнадцать.

Что осмнадцать, что без двух *двадцать*.

1.18 ДВАДЦАТЬ ПЯТЬ, ДВАДЦАТЬ ШЕСТЬ

個数詞 25 と 26 などの数が出てくるのは意外な気もするが、使用例がいくつかある。ただし、一言半句的な言い方をしているため何を言っているのか意味がとれない。この種のフレーズが実は他の項でもよく出てくるのである。

Двадцать пять лет — солдатский век.

Опять *двадцать пять*.

Пять пятков, пятьдесят прутков, *двадцать пять* стрел (борона).

То и есть, что *двадцать шесть*.

1.19 ТРИДЦАТЬ

個数詞 30 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

тридцать, тридцати, тридцати, (対=主), тридцатью, тридцати

同じ 10 の倍数でありながら個数詞 20 に比べるとこちらの方が使用例ははるかに多い。

До *тридцати* лет греет жена, после *тридцати* рюмка вина, а после — и печь не греет.
 Душа моя масленица (говорит семик), перепелиные твои косточки, бумажное твое тело,
 сахарные уста, сладкая речь, красная краса, руса коса, *тридцати* братьев сестра, сорока
 бабушек внучка, трех матерей дочка, ясочка, ты же моя перепелочка.

Кто в двадцать лет не здоров (не хорош), в *тридцать* не умен, а в сорок не богат, тому век
 таким не бывать.

Мужик съел пятнадцать калацыков с калацышком, полведерко огурцыков, полмяконького (т.
 е. полситного) да *тридцать* кисточек рябинки, а все вода водой.

Олончане: олонцы — добры молодцы. Наши молодцы ни бьются, ни дерутся, а кто больше
 съест, тот и молодец. У нас один молодец съел *тридцать* пирогов с пирогом, да все с
 творогом.

Русский час — с днем *тридцать*; деревенский месяц — с неделей десять.

Русский час — со днем *тридцать* (а немецкому и конца нет).

Сватались к девушке *тридцать* с одним, а быть ей за одним.

Смех *тридцать* лет у ворот стоит, а свое возьмет.

Три года — яйцо, *тридцать* лет — медведь, шестьдесят лет — курица (младенец, середовой
 и старик).

Тридцати братьев сестра, сорока бабушек внучка, трехматернна дочка (маслена).

Тридцать лет, как видел коровий след, а все молоком отрыгается.

Тридцать лет, как видел коровий след, а молоком отрыгается.

Тридцать постель, *тридцать* гостей, постель с постелью не сойдется, гость с гостем не
 столкнется (дни в месяце).

Я стар, родилось от меня двенадцать сыновей, а от каждого из них по *тридцать* дочерей,
 наполовину красных и черных (год).

1.20 ТРИДЦАТЬ ТРИ, ТРИДЦАТЬ ШЕСТЬ

個数詞 33 と 36 などの数も使用されている。いずれも主格のみである。

Из осинового дышла *тридцать три* холуя вышло (холуй — лакей и чурка).

Летит *тридцать три* ворона, несут *тридцать три* камня, если под елку под лиственку (борона).

От Холмогор до Колы — *тридцать три* Николы.

Съел молодец *тридцать три* пирога с пирогом, да всё с творогом.

Летело сто гусей, навстречу им один гусь: “Здравствуйте, говорит, сто гусей!” — “Нет, нас не сто гусей: кабы было еще столько, да полстолька, да четверть столько, да ты, гусь, так бы нас было сто гусей”. Сколько их летело? (*тридцать шесть* гусей.)

Плюнь, дунь, свистни, скажи: шестью шесть — *тридцать шесть* (испытание пьяного).

1.21 СОРОК

個数詞 40 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

сорок, сорока, сорока, (対=主), сорока, сорока

普通この個数詞には複数形はないが, 特殊な形で複数形が諺の中で使用されている。その変化形は次の通りである。

сороки, сороков, сорокам, (対=主), сороками, сороках

この形も拾うことにした。思ったより多くある。

Бабий век — *сорок* лет.

Без узла и в *сорок* сажень вервь порвется.

В горшке пиво запарили, а в чашке развели, да после *сорок* бочек навели.

В Москве *сорок сороков* церквей (церкви в Москве разделены на благочиния по *сорокам*).

Вместо сорокоуста можно раздать нищим *сорок* яиц.

Возьми *сорок* алтын! “Сороцы не сороцы, а меньше рубля не отдам”.

Гречу сеять пропустя *сорок* морозов после *сорока* мучеников.

Дороги твои *сорок* соболей, а на правду и цены нет.

Душа моя масленица (говорит семик), перепелиные твои косточки, бумажное твое тело, сахарные уста, сладкая речь, красная краса, руса коса, тридцати братьев сестра, *сорока* бабушек внучка, трех матерей дочка, ясочка, ты же моя перепелочка.

Если младенец не крещеный умрет, то раздать бедным *сорок* тельных крестов.

И один глаз (Свой глаз), да зорек, не надо и *сорок*.

И один глаз, да зорек, не надобно *сорок*.

Кто в двадцать лет не здоров (не хорош), в тридцать не умен, а в *сорок* не богат, тому век таким не бывать.

Мизгиря убьешь — *сорок* грехов сбудешь.

На барышне **сорок** рубашек, ветер подует — спина гола (курица).
На **сорок** мучеников день с ночью меряется, равняется.
На **сорок** мучеников **сорок** птиц прилетают. **Сорок** пичуг на Русь пробирается.
Не клади пряслицы на стол — **сорок** грехов наживешь.
Отколе ветер на солноворота, оттоле будет стоять до **сорока** мучеников (равноденствия).
Первый снег выпадает **сорок** дней до зимы.
Пестра **сорока**, белобока, а все одна в одну.
После покойника **сорок** дней хмельного не берут в рот.
Преподобный Амвросий **сорок** праздников отбросил.
Продли бог (веку) на **сорок сороков**.
С благовещенья осталось **сорок** морозов (утренников).
С ворон болтун начал, на **сорок** перевел.
Сидела (или: Служила) **сорок** лет, высидела **сорок** реп, да и тех нет.
Сорок лет — бабий (женский) век. Девке век обыденный (сутки).
Сорок лет — бабий век (сорок пять — баба ягодка опять).
Сорок лет — прости, мой век! **Сорок** лет — бабий век.
Сорок лет, а сорому нет. Жили, жили, а стыда не нажили.
Сорок мучеников, **сорок** утренников (еще будет).
Сорок недель в тюрьме сидел, да год со днем на — виселице висел (человек, родясь).
Сорок недель в тюрьме сидел, два года на виселице висел (человек).
Сорок недель сидел я в темнице, шесть недель в больнице, двадцать недель меня вязали да год на виселице держали (человек).
Сорок недель хоть кого на чистую воду выведут.
Сорока от **сороки** в одно перо родится.
Сорока-белобока: зеленый хвост, длинный нос (ребятишки дразнят **сорок**).
Сороки святые — колобаны золотые (булочки). Пекут жаворонки.
Сорочи не сорочи, а как **сорок** без одной, так ступай домой.
Срока лет, а сорому нет.
Тридцати братьев сестра, **сорока** бабушек внучка, трехматернна дочка (маслена).
У нашей Параша **сорок** рубашек; вышла на улицу, ветер подул, и спина гола (курица).
Уж **сорок** лет, как правды нет.
Шли **сорок** мышей, несли **сорок** грошей, две мыши поплотше несли по два гроша.

1.22 СОРОК ДВА, СОРОК ПЯТЬ, СОРОК СЕМЬ

個数詞 42, 45, 47 などの数も使用されている。42 と 45 は主格であるが 47 は斜格である。

В *сорок два* года баба ягода, в сорок пять — баба ягодка опять.

В *сорок два* года баба ягода, в *сорок пять* — баба ягодка опять.

Не видал ягоды *сорок два* года; а хоть бы и век, так нужды нет.

Одна ягода в *сорок два* года.

Этой ягоде *сорок два* года. Был хлеб, да стал засушенною.

Ягода(у) не видал *сорок два* года, а хоть бы и век, так нужды нет.

Сорок лет — бабий век (*сорок пять* — баба ягодка опять).

Полтина без алтына, без *сорока семи* копеек.

1.23 ПЯТЬДЕСЯТ

個数詞 50 は次のように変化する。順に主格, 生格, 与格, 造格, 前置格である。

пятьдесят, пятидесяти, пятидесяти, (対=主), пятьюдесятью, пятидесяти
諺の中では主格のみが使われている。

Деды наши жили просто, да лет со сто, а мы *пятьдесят*, да и то на собачью статью.

Лежит колода, по ней дорога: *пятьдесят* сучков да триста листься (год).

Не дал бог ста рублей, а *пятьдесят* — не деньги.

Пять пятков, *пятьдесят* прутков, двадцать пять стрел (борона).

Пятьдесят отростков, триста листов (псалтирь).

Сто тебе быков, *пятьдесят* меринов: на речку бы шли да помыкивали, а речки шли поигрывали (побрыкивалн).

Триста орлов, *пятьдесят* соколов, дерево сухое, верх золотой (будни, воскресные дни и пасха).

Триста орлов, *пятьдесят* соколов, дерево сухое, верх золотой (год).

1.24 ПЯТЬДЕСЯТ ДВА

個数詞 52 が使用されている。トランプ札の総枚数 52 も関係している。

Напустить на кого *пятьдесят два* разбойника. Его ограбили *пятьдесят два* разбойника.

Триста шестьдесят пять галок, *пятьдесят два* сокола, двенадцать орлов, сосенка золотая, маковица сухая (год).

Читать книжку в *пятьдесят два* листа (играть в карты).

1.25 ШЕСТЬДЕСЯТ

個数詞 60 は使用例が 2 例ある。いずれも主格が使われている。

Три года — яйцо, тридцать лет — медведь, *шестьдесят* лет — курица (младенец, середовой и старик).

Шестьдесят лет прошел, ума назад пошел (говорят татары).

1.26 СЕМЬДЕСЯТ, СЕМЬДЕСЯТ СЕМЬ

個数詞 70 については 4 例が抽出された。77 はことばの調子を求めたもので特に意味はない。

Анна семь лет с мужем жила, а до *семидесяти* вдовой была (пророчица Анна, встретившая И. Х. с Симеоном).

Вышел дед *семидесяти* лет, вынес внука старша себя (священник с евангелием).

Курочка Ивашка о *семидесяти* рубашках: ветер дунул — и зад знать.

Село Воронье — днем *семидесяти* господ (мелкопоместное), а ночью одного (кто пойдет на разбой).

В семь лет перебедровали *семьдесят семь* бед.

1.27 ВОСЕМЬДЕСЯТ

個数詞 80 は 1 例のみで、主格が使われている。

Через *восемьдесят* могил хватил один блин (поп на поминках).

1.28 ДЕВЯНОСТО

個数詞 90 がかなり数で使用されている。また、90 を基準にしてその何倍という使い方をしていくものがいくつかある。これは девяносто が名詞としてあつかわれていたためであろう。例えば、пять девяноста のようなものである。これは $5 \times 90 = 450$ を表すが、この項に分類することにした。

Кама усучивает по сту, да по *девянносту*; Волга закоклячивает, да облобачивает (бурлацк.).
Купить на сто рублей сто скотин, платить — и по десяти рублей за одну, и по пяти рублей, и по пятидесяти копеек; по сколько скотин придется на каждую цену? (по пятидесяти копеек

девьяносто скотин, по пяти рублей девять скотин, по десяти рублей одна скотина).

Не далеко к милому — *девьяносто* в сторону.

Не полсорока, а двадцать. Полпятаста — те же пять *девьяносто*.

Первые города от Москвы — два *девьяносто* верст (Владимир, Тверь, Тула, Калуга, Рязань).

У нас (во Владимире) много уголья: от Москвы два *девьяносто* да из Клязьмы воду пей.

Что девять сороков, что четыре *девьяносто* — все одно.

Что полпятаста, что пять *девьяноста* — те же девять сороков с *девьяностом*.

Что хитро, то и просто: девятью десять *девьяносто*.

Шел я мимо, видел диво: висит котел в *девьяносто* ведер (месяц).

1.29 СТО

個数詞 100 の使用例はさすがに多い。個数詞 100 は次のように変化する。

| | 主格 | 生格 | 与格 | 対格 | 造格 | 前置格 |
|----|-----|-----|------|-----|-------|------|
| 単数 | сто | ста | ста | сто | ста | ста |
| 複数 | ста | сот | стам | ста | стами | стах |

この変化形のすべてを検索し該当するものを抽出すると、次のようになる。

Антипка низок, на нем *сто* ризок (кочан капусты).

Артели думой не владати. *Сто* голов — *сто* умов.

Беглому одна дорога, а погонщикам *сто*.

Был на копке, был на топке, был на кружале, был на пожаре, стал на базаре; молод был, *сто* голов кормил; стар стал, пеленаться стал (горшок).

В добрую голову *сто* рук (указчик и работник).

В добрую голову *сто* рук.

В поле стоит столб, у столба *сто* колец, у *ста* колец *сто* плетей, у *ста* плетей *сто* молодцов (хмель).

Всем бы денежкам вашим по катом со двора, а на их место *сто* на *сто*.

Выпил на гривну, а славы (а шуму) на *сто* рублей.

Где просто, там ангелов со *сто*.

Где просто, там ангелов со *сто*; где хитро (где мудрено), там ни одного.

Деды наши жили просто, да лет со *сто*, а мы пятьдесят, да и то на собачью статью.

Думай, не думай, а *сто* рублей деньги.

Жениху да невесте *сто* лет, да вместе.

Живи просто — проживешь лет со *сто*.

Жить *сто* годов, нажать *сто* коров, меринов стаю, овец хлев, свиней подмостье, кошек шесток, собак подстолье.

За доброго человека *сто* рук (или: *сто* голов).

За доброго человека *сто* рук.

Здорово, дед, на *сто* лет.

И кнут не дороже *ста* рублей (т. е. наказывали им за *сто* рублей кражи).

Кабы нашего сокола вабило не сманило — *сто* лет бы на месте сидел.

Как хошь рассуждай, а *сто* рублей деньги.

Кто взял, на том один грех; кто потерял, на том *сто*.

Кто тебя родил, и на том бы доправил *сто* рублей.

Купить на *сто* рублей *сто* скотин, платить — и по десяти рублей за одну, и по пяти рублей, и по пятидесяти копеек; по сколько скотин придется на каждую цену? (по пятидесяти копеек девяносто скотин, по пяти рублей девять скотин, по десяти рублей одна скотина).

Летело *сто* гусей, навстречу им один гусь: “Здравствуйте, говорит, *сто* гусей!” — “Нет, нас не *сто* гусей: кабы было еще столько, да полстолька, да четверть столько, да ты, гусь, так бы нас было *сто* гусей”. Сколько их летело? (тридцать шесть гусей.)

Лучше один раз увидеть, чем *сто* раз услышать.

Меняй взад — вперед *сто* рублей — ничего не останется.

Молчок — *сто* рублей. Молчанье (Молчок) — золотое словечко.

На Руси, слава богу, дураков лет на *сто* припасено.

На *сто* пусто, на пятьсот ничего.

На яме, яме *сто* ям с ямой (наперсток).

На ямке, ямке *сто* ямок со приячком (наперсток).

Наши правы, а *сто* рублей дали.

Не держи *сто* рублей, держи *сто* друзей.

Не имей *сто* рублей, а имей *сто* друзей.

Не купи на *сто*, купи на статью!

Одет просто, а на языке речей со *сто*.

Одним махом *сто* душ побивахом.

Одним махом *сто* побивахом, а прочих не клахом (не считахом).

От слова до дела — *сто* перегонов.

Пир на деньгу, а славы на *сто* рублей.

Плев — пять рублей, а *сто* — не деньги.

По рублю ступает, рубль подымает, на полтину глядит, **сто** рубли говорит (знахарь и коновал).

Помилуйся и сохрани господь на **сто** лет со днем (на **сто** лет со прилетками).

Просто — попадай во **сто** (с биксовой игры).

Рубль бежит, **сто** догоняет, а как пятьсот споткнется, неценённый убьется (о псовой охоте: заяц, собака, лошадь и барин. Малорос.).

Русы волосы **сто** рублей, буйна голова — тысяча, а всему молодцу и цены нет.

Свет Кощей, господин Кощей: **сто** людей кормил, гулять ходил, головку сломил; кости выкинули, псы не понюхали (горшок).

Сколько голов, столько умов. **Сто** голов — **сто** умов.

Служи **сто** лет, а не выслужишь **ста** реп.

Спорынья в квашню (привет бабе, когда хлебы месит, а ответ: **Сто** рублей в мощну!).

Спорынья в квашню! — **Сто** рублей в мощну! (пожелание гостя и ответ хозяйки.)

Спорынья в квашню! (ответ: **сто** рублей в мощну!)

Сто гостей, **сто** постелей — одному гостю нет постели (матица).

Сто гостей, **сто** постелей: у каждого гостя своя постеля (бревна избы).

Сто лет, да двадцать, да маленьких пятнадцать.

Сто молодцов на одном головище (изголовье) спят (накат на матице).

Сто полен в запасе, а на истопку не будет (ведра).

Сто рублей давали, да из кармана не вынимали.

Сто рублей есть, так и правда твоя.

Сто рублей на мелкие расходы. (пожелание после чоуху.)

Сто тебе быков, пятьдесят меринов: на речку бы шли да помыкивали, а речки шли поигрывали (побрыкивалн).

Стоит поп низок, на нем **сто** ризок (вилок, кочан).

Стоит **сто** столбов, у **ста** столбов **сто** колецов (колец), у **ста** колецов **сто** кистей, у **ста** кистей **сто** ветвей (хмель).

Стоит **сто** столбов, у **ста** столбов **сто** колецов, у **ста** колец **сто** коней, у **ста** коней по **сту** узд, у **ста** узд по **сту** кистей, у **ста** кистей **сто** вевестей (хмель).

Стучит, бренчит, **сто** конец бежит: что есть в околотке, весь хлеб поест (мельница).

У богатого **сто** рублей лежит, а у бедного остальной бежит.

Умная (Добрая) голова **сто** голов кормит, а худая и себя не прокормит.

Хоть **сто** лет думай, лучше этого не выдумаешь.

Цена зайцу — две деньги, а бежать — **сто** рублей.

Чванства на *сто* рублей, а животов на три полушки.

Что стом вито, обвито, повито? Кто то отганет, тому *сто* все (кринка в бересте или молостов).

Чуваши хоть *сто* человек, все вместе говорят.

Шейка копейка, алтын голова, *сто* рублей борода.

Эта вещь на охотника, стоит *сто* рублей.

Это верно, как *сто* баб нашептали.

Этот нос — через Волгу мост. Этот нос *сто* лет рос.

В поле стоит столб, у столба *сто* колец, у *ста* колец *сто* плетей, у *ста* плетей *сто* молодцов (хмель).

Живучи просто, доживешь лет до *ста*; а кто лукавит, того скоро черт задавит.

И кнут не дороже *ста* рублев (т. е. наказывали им за *сто* рублей кражи).

Не дал бог *ста* рублев, а пятьдесят — не деньги.

Русалки его зашекотали, утопили. Лоба *ста* (лопа *ста*) утопила.

Служи *сто* лет, а не выслужишь *ста* реп.

Ста рублей нет, а рубль не деньги.

Стоит *сто* столбов, у *ста* столбов *сто* колец, у *ста* колец *сто* коней, у *ста* коней по *сту* узд, у *ста* узд по сту кистей, у *ста* кистей *сто* вевестей (хмель).

Что милее *ста* рублей? — Двести.

<旧形>

Всем гостям по *сту* лет, хозяину двести, да всем бы вместе.

Кама усучивает по *сту*, да по девяносту; Волга закоклячивает, да облобачивает (бурлацк.).

На одного виноватого по *сту* судей.

По *сту* на день, по тысяче на неделю (привет молотильщикам).

Пойдем вместе, найдем двести, разделим по *сту*.

Прадеды ели просто, да жили лет по *сту*.

Русский молодец — *сте* басурманам конец.

Крым — не крив, Азов — не о *сте* шагов.

Плеть плетена, вверх сведена: о *сте* углов, о тысяче рублев (церковь).

1.30 СТО ОДИН

個数詞 101 などという, ちょっと信じ難い数なども使われている。以下の 2 例が検出された。

Сто один брат, все в один ряд, вместе связаны стоят (частокол).

У невесты женихов *сто один*, а достанется один.

1.31 ДВЕСТИ

個数詞 200 は旧形 *два-ста* の形でも使われている。ただし、これは謎かけ遊びで諺ではない。

В нашей дести листов по *двести*.

Всем гостям по сту лет, хозяину *двести*, да всем бы вместе.

Есть и *двести*, да не в одном месте.

За бестию *двести*, а за каналью ничего.

Кто переносит вести, тому бы на день плетей по *двести*.

Не знаешь чести, так палок *двести*.

Пойдем вместе, найдем вести (найдем и *двести*).

Пойдем вместе, найдем *двести*, разделим по сту.

Украли на *двести*, да и разделили вместе.

<旧形>

Два-ста будаста, четыре-ста ходаста, пято-сто махай (корова).

Два-ста пудаста, четыре-ста копыласта, один болтун да два ухтахта (корова: туловище, ноги, вымя, глаза).

Два-ста рогаста, четыре-ста ходаста, один махтун и два ухтахта (корова: два рога, четыре ноги, хвост и два уха).

Два-ста рогаста, четыре-ста ходаста, один хтырок да два ухтырка (корова).

1.32 ТРИСТА ШЕСТЬДЕСЯТ ПЯТЬ

個数詞 365 などというものが使用されている。これは1年の日数にちなんだものである。

Триста шестьдесят пять галок, пятьдесят два сокола, двенадцать орлов, сосенка золотая, маковица сухая (год).

1.33 ЧЕТЫРЕСТА

個数詞 400 はなぞかけ遊びの数として使用されている。

Два-ста будаста, *четыре-ста* ходаста, пято-сто махай (корова).

Два-ста пудаста, *четыре-ста* копыласта, один болтун да два ухтахта (корова: туловище, ноги, вымя, глаза).

Два-ста рогаста, *четыре-ста* ходаста, один махтун и два ухтахта (корова: два рога, четыре ноги, хвост и два уха).

Два-ста рогаста, *четыре-ста* ходаста, один хтырок да два ухтырка (корова).

1.34 ПЯТЬСОТ

個数詞 500 はなぞかけ遊びの数として使用されている。

Две тысячи веников, *пятьсот* голиков, по три денежки сотня — много ли рублей?

На сто пусто, на *пятьсот* ничего.

<旧形>

Два-ста будаста, четыре-ста ходаста, *пято-сто* махай (корова).

1.35 СЕМЬСОТ

個数詞 700 は距離として使用されている。

Валяй, кургузка, недалече до Курска: семь верст отъехали, *семьсот* ехать.

1.36 ТЫСЯЧА

個数詞 1000 以上はほとんど使われていない。日常生活の中では、たしかにあまり必要ない数である。ただし、切れ目のいい千, 二千, 五千などの使用例はあった。

По сту на день, по *тысяче* на неделю (привет молотильщикам).

Русы волосы сто рублей, буйна голова — *тысяча*, а всему молодцу и цены нет.

Рысаку цена *тысяча* рублей, а за сбой поруки нет.

Тысяча братьев одним поясом подпоясаны, на мать поставлены (сноп на земле).

1.37 ДВЕ ТЫСЯЧИ

Две тысячи веников, пятьсот голиков, по три денежки сотня — много ли рублей?

1.38 ПЯТЬ ТЫСЯЧ

Певун, певец нашел хлевца, в нем *пять тысяч* овец (улей).

1.39 ВОСЕМЬ ТЫСЯЧ

В мае месяце, по *осьмой тысяче*, родился конь крылатый, не боится царя в палате (комар)

Дьявол *осьмую тысячу* живет.

参考文献

- [1] 栗原成都著「スラブのことわざ」ナウカ株式会社, 1989
- [2] キム ミネ著, 浅沼寛司編「ロシア語慣用句辞典」東洋書店, 2001
- [3] Фразеологический словарь русского языка, Под редакцией А. И. Молоткова, Изд. «Русский язык», Москва, 1978
- [4] <http://www.telegraph.ru/>
- [5] 戸辺又方著「ロシアの言語と文化」ナウカ株式会社, 1996
- [6] АН СССР Институт Русского языка. Словарь русского языка XI – XVII вв. Изд. «Наука», Москва, 1976
- [7] И. И. Срезневский, Материалы для словаря древнерусского языка, Типография императорской Академии Наук, СПб, 1903
- [8] Н. Д. Русинов, Древнерусский язык, Изд. «Высшая школа», Москва, 1997
- [9] В. В. Иванов, Историческая грамматика русского языка, Изд. «Просвещение», Москва, 1990
- [10] Г. А. Хабургаев, Очерки исторической морфологии русского языка «Имена», Изд. «МГУ», Москва, 1990
- [11] 木村彰一著「古代教会スラブ語入門」白水社, 1985
- [12] G. O. ヴィノクール著, 石田修一編著「ロシア語の歴史」吾妻書房, 1966
- [13] Н. С. Валгина, Д. Э. Розенталь, М. Н. Фомина, Современный русский язык, Изд. «Логос», Москва, 2001
- [14] 東郷正延他編「研究社露和辞典」研究社, 1999
- [15] 泉井久之助著「印欧語における数の現象」大修館書店, 1978
- [16] Энциклопедия «Русский язык», Научное издательство «Большая Российская Энциклопедия», Москва, 2003
- [17] Математика Школьная Энциклопедия, Главный редактор С. М. Никольский, Научное издательство «Большая Российская Энциклопедия», Москва, 1996
- [18] Г. И. Глейзер, 山崎昇・保坂秀正訳「グレイゼルの数学史」I, II, III, 大竹出版, 2000
- [19] <http://www24.brinkster.com/newh/poslovitsa>
<http://www.yur.ru/art/poetry/poezla9.htm>
<http://govaril.narod.ru/>
- [20] В. И. Даль, Пословицы русского народа, тт.1, 2, «Художественная литература», Москва, 1984
- [21] Собрание сочетаний В. И. Даля, (P) 2000-2001, IDDK